

「エトノス」に基づくアカイア連邦の公職制度と統合政策

——古代ギリシアの共同体を捉える新たな視角——

岸 本 廣 大

【要約】 古代ギリシアにおいて複数の共同体から構成された「連邦」は、ポリスの相対化を試みる近年の研究動向の中で注目されるが、依然ポリスのみを単位とした見方に規定されている部分がある。しかし、ヘレニズム時代のアカイア連邦の公職制度、特にノモグラフォイ職を加盟ポリスに割り当てる原則の問題は、そのような見方からは説明できない。その問題に対して、本稿は地域的アイデンティティに基づいた共同体「エトノス」という単位が有効であると考察した。そして、「エトノス」という単位による分析からは、アカイア連邦が複数の「エトノス」から成り、公職制度において「エトノス」に配慮していたことが示された。さらに、碑文における「アカイア人のコイノン」という文言の用例と連邦の議会制度改革の経緯から、連邦の「エトノス」に対する統合政策を考察し、アカイア連邦が「エトノスの連邦」を志向していたことを明らかにした。

史林 九六巻二号 二〇一三年三月

はじめに

ポリスが古代ギリシア世界の重要な構成要素であったことは、研究の進展した今日でも疑いない。ゆえに、蓄積の厚いこれまでの研究も、多くはポリスに焦点を当ててきた。ポリスと国民国家を重ねる近代的な歴史観と史料の制約に由来して、とりわけ研究の中心となったのは、民主政ポリスとして繁栄を誇ったアテナイであった。しかし、ギリシア史研究においてその歴史観が揺らいだ一九九〇年代から、ポリスという視角を相対化しようとする試みが活発になってきた。例え

ば、コペンハーゲン・ポリス・センターの研究プロジェクトは、古典期の人々の目線からポリスの再定義を試み、Brook^①とHodkinsonが編んだ論文集は、アテナイ、ひいてはポリスを越えた新しいギリシア史を模索しようとしている。②。その中で、ポリスと異なる視角として連邦にも注意が向けられた。③。古代ギリシアの連邦は、複数のポリスが結びついた組織と一般的に理解されている。④。そして、主として外交のために加盟ポリスから独立した中央機関を有し、同様の公職者がその活動を担っている点から、連邦への着目は確かにポリスという視角の相対化を試みるものであった。しかし、それらの研究は連邦の構成単位としては依然ポリスを重視していた。そのため、代表的なアカイア連邦を対象とした先行研究を整理すると、ポリスという単位からは説明のつかない現象が析出される。本稿はこの問題に対し、ポリスとは異なる新しい単位の可能性を検討していく。最終的には、ポリスを相対化し、ポリスを含めた古代ギリシアの共同体を包括的に捉え直す新たな視角を提供することがきるだろう。

具体的な議論の前に、本稿で用いる連邦という用語について簡単に述べる。古代ギリシアにおいて、ポイオティアやアイトリアに現代の連邦と類似する共同体が存在したことはよく知られている。しかし、そのような共同体は「league」や「confederation」「federation」と表われ、日本語においても「連邦」だけでなく、「同盟」や「連盟」と訳されるなど、明確な用語の使い分けはなされていない。そもそも古典ギリシア語の語彙に、そうした共同体を直接的に指すものではなく、「エトノス」や「コイノン」、「シユンポリティア」といった語が転用されていた。本稿では、連邦という用語の正否については論じないが、複数の共同体から成り、かつ加盟共同体から独立した中央機関を組織する共同体を連邦と表すこととする。⑤。

※ 史料や欧語文献の略称は、原則S.Hornblower & A.Sparto (eds.) [1996] *The Oxford Classical Dictionary* 3rd ed., Oxford (以下OCD³) に従い、そこに記載のないものに限り、ウェブサイト上の

Lanée philologique (<http://www.lanee-philologique.com/>) の略記法に従う。また注で複数回言及される文献は、「著者名」【出版年】（最初に言及した章および注番号）という形式で示す。

- ① ロスンノーゲン・ポリス・センター (The Copenhagen Polis Centre、以下CPC) の研究成果は、多くの報告集にまとめられているが、この本はその集大成として M.H.Hansen & T.H.Nielsen (eds.) [2004] *An Inventory of Archaic and Classical Polis*, Oxford を挙げるに留める。長谷川による書評 (長谷川岳男 [2006] 『西洋古典学研究』五四、一三八—一四一頁) も参照。なお、CPC の研究手法については、周藤秀幸 [2010] 『ロドス島ウリア遺跡と前古典期の東地中海世界』桜井万里子・師尾晶子編『古代地中海世界のダイナミズム——空間・ネットワーク・文化の交錯』山川出版社、一四—一頁で、問題点を指摘されている。
- ② R.Bruck & S.Hodkinson [2000] *Alternatives to Athens. Varieties of Political Organization and Community in Ancient Greece*, Oxford.
- ③ K.Buraselis [1994] *Unity and Units of Antiquity*, Athens; L.A. Foresti et al. (eds.) [1994] *Federazioni e federalismo nell'Europa antica*, Milan; K.Buraselis & K.Zournoulakis (eds.) [2003] *The Idea of European Community in History* vol.2, Athens.

第一章 先行研究と問題の所在——連邦のポリス的理解の限界——

第一節 アカイア連邦の公職制度

本稿が対象とするアカイア連邦は、ペロポネソス半島北部のアカイア地方に位置した複数の共同体により、前五世紀末までに成立した。前四世紀末頃に一度解体されたものの、前二八一—〇年に再建されると大きく発展し、前一九一年には半島全体をその影響下に置く。その後、前一四六年にローマに敗北するまで、ギリシア本土においてマケドニアに次ぐ

- ④ J.A.Olarsen & P.J.Rhodes, *OCD*³ s.v. "federal states".
- ⑤ 古代ギリシアにおける連邦の研究史については、拙稿 [2009] 「連邦から見たポリスのアウトノミア——ポイオチア連邦の分析を通じて——」『西洋古代史研究』九、一—三二頁、特に三—四頁を参照。連邦を表す三つのギリシア語については、A.Giovannini [1971] *Untersuchungen über die Natur und die Anfänge der bundesstaatlichen Symphoiteia in Griechenland*, Göttingen 443; F.W.Walbank [1985] 原著 1976/7] *Were There Greek Federal States?* in: *Selected Papers. Studies in Greek and Roman History and Historiography*, pp.20-37 (= *SCI* 3, pp.27-51) を参照。なお、古代ギリシア人が連邦なる概念を有していたのかどうかも問題になっているが、未だ議論があるが、詳細は G.A.Lehmann [2001] *Ansätze zu einer Theorie des griechischen Bundesstaates bei Aristoteles und Polybios*, Göttingen を参照。本稿は、古代ギリシアにおける特定の共同体を分析・理解するために有効な概念として、連邦を用いる。

大勢力であり続けた。このアカイア連邦は一九世紀から注目を浴び、初期の研究はアカイア連邦を一九世紀当時の連邦に連なる祖形として肯定的に評価した^①。二〇世紀に入ってからには、その政治史や制度史が注目され、より綿密な研究が行われるようになり、連邦の対外政策や議会の詳細な研究が特に盛んになった^②。また、ローマ史研究の側から、東地中海へのローマの拡大と関連したアカイア連邦の役割を論ずる研究が現れた^③。これらの諸研究は、それまで肯定的に評価されたアカイアの連邦組織を過大評価せず、むしろ加盟ポリスの独自性を強調する傾向を有した。そして二〇世紀末からは、連邦の成立前や解体後を含めた、前古典期からローマ時代に渡る広い時代を対象とした考古学的な調査が盛んである^④。

このように、一九世紀からの研究蓄積が厚いアカイア連邦であるが、その公職制度については不明な点が多い。前二五七／六年に制度改革がなされたことは知られているが^⑤、それ以前の制度については書記一人とストラテゴス二人を輪番制で担当していたということ以外はほとんどわかっておらず、公職者の個人名も全く知られていない。必然的に、公職制度の研究は制度改革が対象となる。

改革後は、選出されるストラテゴス一人に連邦の全権が委任されることになった。将軍を意味するその名の通り、その職務は戦時の軍隊指揮や平時の軍事訓練が主だが、それゆえ連邦全体を統率するなど、絶大な影響力をもつ指導者であった。任期一年のこの役職は、権力の集中を防ぐためか、連続して就任することは禁じられていたものの、その就任回数に制限はなかった^⑥。

それ以外の公職者については史料にあまり見られず、職務内容や構成はほとんど不明である。ヒュポストラテゴスはストラテゴスの補佐と考えられているが、構成人数や具体的な権限については知られていない^⑦。ヒッパルコスとナウアルコスは、語義通りそれぞれ騎兵と艦船を指揮する役職とされる。役職名は明示されないが、実際の戦闘で部隊指揮を務めた者も公職者の可能性がある。軍隊に関する役職以外では、一〇名から成るダミウルゴイが知られている。この役職は、前二八一／〇年の連邦再建以前にも見られた^⑧。史料では先議を行うような描写もあるが^⑨、実際の政務に携わる役職だったと

考えられている。また、各地に派遣された使節は、任期や職務内容が様々だが、議会で選出されることが多く、公職者の側面も強い。

後述するノモグラフォイを含め、以上が現段階で知られているアカイア連邦の役職の全てである。これらのうち、先行研究ではストラテゴス^⑩とノモグラフォイに関心が集まり、それ以外の役職や公職制度全体を考察する研究は少ない。その中で、Ozbeの研究は公職者全体を詳細に扱うほぼ唯一の研究として、アカイア連邦の公職制度研究の一つの到達点をなしている。彼は、アカイア連邦とアイトリア連邦の公職者の出身ポリスを分析し、その多様さの程度から両者の政体を論ずる。だが、アカイア連邦に対する分析においては、公職者の出身ポリスの構成について時代的変遷を考慮しておらず、さらに、ノモグラフォイという役職を直接は議論していない。しかし、次節で示すように、ノモグラフォイはアカイア連邦の公職制度を分析するうえで欠かせない役職である。さらに、Ozbeの論文が発表された当時は確認されていなかったノモグラフォイの碑文が、近年の考古学的成果によって新しく発見されたため、その新史料の分析も組み入れる必要がある。そこで、次節ではノモグラフォイに焦点を当て、本稿が扱う問題をより明確にしていく。

第二節 ノモグラフォイをめぐる問題

碑文から知られるノモグラフォイは、役職名の通り法律の記録に関わっていたと推測されるが、職務内容の詳細は不明である。ノモグラフォイ全員の名と出身ポリスが刻まれたエピダウロス出土の碑文^⑪（以下、エピダウロス碑文）によれば、一七ポリスから一〜三人が選出、全二四人で構成されている（表一）。ポリスごとにその内訳を見ると、アルゴスとメガレーポリスが三人ずつ、アイギオンとデュメ、シキユオンが二人ずつ、それ以外の諸ポリスが一人ずつである。構成人数と出身ポリスの多さから、ノモグラフォイについての先行研究は、その役職を各ポリスへ割り当てる原則について、長らく議論してきた。

表一：ノモグラフォイの各ポリスへの割り当て人数

表一—一：エビダウロス碑文

ポリス名	人
アルゴス	3
メガレーポリス	3
アイギオン	2
デュメ	2
シキュオン	2
アスケイオン	1
プーラ	1
エビダウロス	1
ヘルミオネ	1
クレオナイ	1
ルーソイ	1
パトゥライ	1
ペッレネ	1
ファライ	1
フェネオス	1
フリウス	1
トゥリタイア	1
合計	24

表一—二：アイギオン碑文

ポリス名	人
スパルタ	3
メガレーポリス	2
メッセネ	2
アンティゴネイア	1
アシネ	1
アスケイオン	1
ヘライア	1
カフュアイ	1
クレイトル	1
コロネ	1
キュパリシア	1
ルーソイ	1
オルコメノス	1
パツランティウム	1
テゲア	1
ヒュパネ	1
フィガレイア	1
合計	21

前半の欠落部は19-24人分？
Cf. Rizakis [2008] (第一章注
④) N.116

アカイア連邦についての先駆的研究者であるAymardは、この問題を消極的に解釈し、連邦に属する人々がそれらに注意を向けなかったため、原則のようなものは存在しなかったかもしれないと結論付けた。連邦研究の基礎を築いたLarsenも、これを受け入れている^⑮。しかし、Swobodaが主張し、後にLehmannやGschntzerなどが展開した、各ポリスの人口や重要性に応じて役職を割り当てる比例の原則があったとする説が、その後は有力となった^⑯。ただし、その説においても、コリントスやオルコメノスなどの比較的大きいポリスの出身者がいないという問題が残り、様々な解釈が行われてきた。例えば、LehmannやGschntzerはポ

イオテイア連邦の例から、小さな複数のポリスがグループを作り、輪番制で一人の公職者を出していたと考えている^⑰。他方Corstanは、後述するよ

うにアカイア連邦が地区に分割されていたと推定して、それを基準に役職が割り当てられたとする^⑱。ただ、利用できる史料がエビダウロス碑文一点のみであり、先行研究の議論はどれも決定的ではなかった。

一九九九年、欠落があるものの、前一九二〇—一九二一年以降と推定される碑文がアイギオンで新たに発見された^⑲（以下、アイギオン碑文）。その碑文からは、一七ポリス出身の二人がノモグラフォイの一部を構成していたことが読み取れる（表一—二）。

ポリスごとの内訳は、スパルタが三人、メガレーポリスとメッセネが二人ずつ、それ以外の諸ポリスが一人ずつである。この碑文を紹介した Risakis は、ノモグラフォイが比例的に選出され、人数はエピダウロス碑文同様一〜三人であること、小ポリスはグループによる輪番制だったことが確かめられたとする。そして、スパルタなどの加盟による連邦の拡大が、ノモグラフォイの構成を変化させたとも主張した。以上が現在の通説となっているが、特に Costen や Risakis の指摘からは、この割り当ての原則をめぐる問題が、ポリスを唯一の割り当ての単位としては説明できないことを強く示す。ここに連邦研究が当然の前提としていたポリスという視角の限界が露呈するのである。

第三節 Costen 説——シュンテレイア——の検討

ノモグラフォイの割り当ての原則は、ポリス以外にどのような単位を用いれば、分析することができるのだろうか。この問題について、近年積極的に取り組んだのが Costen である。彼は、兵員や資金の調達を目的とした地区に分かれていたことが、古代ギリシアの連邦に共通する特徴と考えている。そして、アカイア連邦においてはポリュビオスの記述から「負担の共有」を意味するシュンテレイアという地区が存在することを指摘し、そのシュンテレイアの軍隊を指揮するのがヒュポストラテゴスであると解釈した。そして、先に挙げたエピダウロス碑文から、当時のアカイア連邦にはシュンテレイアが五つ存在し、それぞれ五人ずつノモグラフォイが割り当てられたと推測している^②。この説を、アイギオン碑文を検討した Risakis も有力視している。

だが、Costen の解釈をそのまま受け入れることは難しい。まず、シュンテレイアをアカイア連邦の地区とみなす根拠は、「パトゥライのシュンテレイアの (της οὐντελειας της Παρπηνης)」ヒュポストラテゴスで、ファイ出身のリュコスに關するポリュビオスの記述のみである^①。このシュンテレイアを地区と解釈するのが、確かに主流であるが、そもそもこの部分については異読もある^②。さらに、「パトゥライのシュンテレイア」という地区の存在を認めたとしても、それを構成

するポリスが、パトウライ、デユメ、ファライ、トゥリタイアの四ポリスとする Corsten の主張には疑問が残る。というのも、彼が根拠とする箇所には、これら四ポリスの全てが常に挙げられているわけではないからである。また、Corsten が挙げた事例において、シュンテレイアは軍事的な機能しか有していない。他方で、同盟市戦争の最中にデユメ、ファライ、トゥリタイアの三ポリスがアカイア連邦への納付金支払いを停止した事例に、パトウライが言及されておらず、他の三ポリスに同調したのか、あるいはその納付金を肩代わりしたのか不明である。ポリュビオスの記述からは、この納付金の支払いが四ポリスの属するとされる「パトウライのシュンテレイア」を介していたとは読み取れない。連邦への納付金支払いに関する財政的な単位として、シュンテレイアは機能していかないと考えるべきだろう。そもそも「パトウライのシュンテレイア」以外にシュンテレイアが存在したのかという問題もある。先に示したように、史料にそのような記録はなく、連邦の再建を主導した四ポリスのみが特別なまとまりを形成していたとも考えられる。もし、シュンテレイアが「パトウライのシュンテレイア」のみであったならば、連邦全体に割り当てられる役職の単位とはなりえない。以上から、本稿は Corsten の主張するシュンテレイアがアカイア連邦を構成する地区であることには、直ちに賛同できない。もしシュンテレイアなる地区が存在したとしても、その機能は限られており、財政や公職者の割り当てがこのシュンテレイアに基づいていたと考えるのは難しいだろう。

第四節 役職全体の分析

では、ポリスやシュンテレイア以外に、どのような単位でノモグラフォイの割り当てを捉えるべきなのか。本稿は、アカイア連邦の公職者全体を対象として分析することで、この問題に取り組む。というのも、前章で主に検討した O'Neil や Corsten の研究は、それぞれ前者はノモグラフォイ以外の役職（以下、便宜的に役職一般とする）、後者はノモグラフォイのどちらか一方しか扱っていないからである。しかし、ノモグラフォイを割り当てる原則が存在するならば、それはノモ

グラフィオイだけではなく、役職一般にも適用された可能性がある。もちろん、役職一般とノモグラフィオイでは、その重要性や構成人数が異なっており、それゆえに選出方法も同じであったとは限らない。そのため、まず本節で役職一般とノモグラフィオイの出身ポリスの傾向を分析し、そこに共通した特徴が見いだせるのかを明らかにする。

具体的な分析の前に、分析の方法と対象を示す。本稿は、分析にあたってアカイア連邦の公職者の役職・出身ポリス・就任頻度に着目し、あるポリスからどのような公職者がどれだけ輩出したのかを調査した(表二)^②。役職一般の事例は、ほとんどストラテゴスであるが、全体の傾向を探るためにも、第一節で挙げたヒュポストラテゴス、ヒツパルコス、ナウアルコス、ダミウルゴイといった事例数の少ない役職も分析対象とした。それ以外に、役職名はないものの、連邦の軍隊指揮者や連邦が派遣した使節も、その性格上、連邦の公職者として扱い、補助的な事例として分析に組み入れる。頻度については、同一人物による複数回の就任も数え入れた「のべ回数」を示した。

では、表二を参考にしながら、まず役職一般の出身ポリスを分析していこう。Ονομαも指摘するように、特定のポリスへ集中する傾向が見られ、メガレーポリスとシキュオンは特に顕著である。最高役職であるストラテゴスの出身は九ポリスに限られ、やはりメガレーポリスとシキュオンが突出している。ストラテゴスは毎年一人しか選出されないため、出身ポリスよりも個人の資質がこの偏りに大きく影響したと考えられる。^③だが、九ポリスのうち五つがアカイア連邦初期の加盟ポリスというのは注目に値する。初期の加盟ポリスの中では公職者の出身ポリスが比較的分散しているのに対し、後の加盟ポリスの中では独占といえる状況が見られる傾向は、ストラテゴス以外の役職でも同様である。このことは、初期の連邦の加盟ポリスと、再建後に加盟したポリスとの間で、役職の割り当ての仕方にも何らかの違いがあったことを示唆する。

他方でノモグラフィオイは、役職一般と異なり多くのポリスに割り当てられ、特定のポリスへの極端な集中は見られない。しかし、複数のノモグラフィオイが割り当てられているポリスは、エビダウロス碑文で一七ポリスのうち五つ、アイギオン碑文で一七ポリスのうち三つと、少なからず偏りが見られる。しかも、それらのポリスのうち、デュメ、メガレーポリス、

表二：アカイア連邦の公職者の出身ボリス（のべ回数）

	St.	Hy. St.	Nau.	Hipp.	軍	Dami.	使節	Nomo.	合計
アイゲイラ	4						3		7
アイギオン					1		4	2	7
アスケイオン								2	2
プーラ								1	1
デュメ	3	1			4		1	2	11
カリュネイア	1		1						2
レオンティオン	1						2		3
パトゥライ			1					1	2
ベッレネ					1	1		1	3
トゥリタイア								1	1
ファライ	1	1						1	3
●アカイア地域	10	2	2	0	6	1	10	11	40
ヘライア								1	1
カフユアイ								1	1
クレイトル								1	1
マンティネイア								1	1
メガレーボリス	17			2	1		10	5	35
オルコメノス								1	1
パツランティウム								1	1
ルーソイ								2	2
テゲア								1	1
フェネオス								1	1
フィガレイア								1	1
ヒュパネ（トゥリフュリア）								1	1
●アルカディア地域	17	0	0	2	1	0	10	17	49
●シキュオン（＝地峡地域）	7				1		6	2	16
アルゴス	1						1	3	5
エビダウロス								1	1
ヘルミオネ								1	1
クレオナイ								1	1
フリウス								1	1
●アルゴリス地域	1	0	0	0	1	0	1	7	9
●スパルタ（＝ラコニケ地域）	1	0	0	0	0	0	0	3	4
アシネ								1	1
コロネ								1	1
キュバレシア								1	1
メッセネ								2	2
●メッセニア地域	0	0	0	0	0	0	0	5	5
●エリス（＝エリス地域）	0	0	0	0	0	0	1	0	1
不明	16	1	0	1	2	0	6	0	26
合計	45	3	2	3	10	1	27	45	150

凡例

St. ストラテゴス
 Hy.St. ヒュボストラテゴス
 Nau. ナウアルコス
 Hipp. ヒッバルコス

軍 軍隊指揮者
 Dami. ダミウルゴイ
 使節 使節
 Nomo. ノモグラフオイ

●は各地域の合計を示す。地域区分は Hansen & Nielsen (ed.) [2004] (「はじめに」注①) に拠った。
 ただし、トゥリフュリアに属するヒュパネはアルカディアに含む。第三章注①を参照。

※ノモグラフオイ以外の依拠史料は表三を参照

表三：公職者の出身ポリス・依拠史料一覧（丸囲いの数字はストラテゴスの就任回数／就任年はすべて紀元前／※は先行研究による推定のため、表二には反映していない）

就任年	名前	役職名	出身ポリス	依拠史料	備考
257/6	マールゴス	ストラテゴス	カリュネネイテ	Polyb. 2. 43. 2	
255/4	マギョス	ストラテゴス	シキエオン	Purit. <i>Vit. Arist.</i> 16. 1	
243/2	テラトス②	ストラテゴス	シキエオン	Polyb. 2. 43. 4; Purit. <i>Vit. Arist.</i> 16. 2	
※ 241/0	テラトス③	ストラテゴス	シキエオン	Walbank [1933] (第一巻注⑩) pp.174f.	
240/39	テイキテレウス	ストラテゴス	?	<i>Syll.</i> N 471	
※ 239/8	テラトス④	ストラテゴス	シキエオン	Walbank [1933] (第一巻注⑩) pp.174f.	
※ 237/6	テラトス⑤	ストラテゴス	シキエオン	Walbank [1933] (第一巻注⑩) pp.174f.	
236/5	テラトス⑥	ストラテゴス	?	Polybanos 2. 36	
※ 235/4	テラトス⑦	ストラテゴス	シキエオン	Walbank [1933] (第一巻注⑩) pp.174f.	
234/3	リュキテテラス1①	ストラテゴス	メガレ-ポリス	Purit. <i>Vit. Arist.</i> 30. 4	
※ 233/2	リュキテテラス1②	ストラテゴス	シキエオン	Walbank [1933] (第一巻注⑩) pp.174f.	
232/1	リュキテテラス1③	ストラテゴス	メガレ-ポリス	Purit. <i>Vit. Arist.</i> 30. 4	
※ 231/0	リュキテテラス1④	ストラテゴス	シキエオン	Walbank [1933] (第一巻注⑩) pp.174f.	
230/29	リュキテテラス1⑤	ストラテゴス	メガレ-ポリス	Purit. <i>Vit. Arist.</i> 30. 4	
※ 229/8	テラトス⑧	ストラテゴス	シキエオン	Walbank [1933] (第一巻注⑩) pp.174f.	
マールゴス	マギョス	ストラテゴス	カリュネネイテ	Polyb. 2. 10. 5	Cf. Walbank [1957] (第一巻注⑤) pp.160f.
228/7	マールゴス	ストラテゴス	テラゴス	Purit. <i>Vit. Arist.</i> 35. 3	
227/6	テラトス⑨	ストラテゴス	シキエオン	Purit. <i>Vit. Arist.</i> 35. 5	テラタルゴスによれば12回目
227	ニコテネス	メケトニテへの使節	メガレ-ポリス	Polyb. 2. 48. 4-8. 50. 3, 5	使節の要請
ケクキダス	ケクキダス	メケトニテへの使節	メガレ-ポリス	Polyb. 2. 48. 4-8. 50. 3	同上
C226-4	小テラトス	ストラテゴス	シキエオン	Polyb. 2. 51. 5	テラトスの息子 目的は上と同じ
226/5	ヒュメウパテス	ストラテゴス	?	Purit. <i>Vit. Cleom.</i> 14. 1	
225/4	テラトス⑩	ストラテゴス	?	Purit. <i>Vit. Arist.</i> 38	
※ 224/3	テラトス⑪	ストラテゴス	シキエオン	Walbank [1933] (第一巻注⑩) pp.174f.	
223/2	テラトス⑫	ストラテゴス	?	Polyb. 2. 53. 2	
222	ケクキダス	メガレ-ポリス兵指揮官	メガレ-ポリス	Polyb. 2. 65. 3	セラシテの戦い
※ 222/1	テラトス⑬	ストラテゴス	シキエオン	Walbank [1933] (第一巻注⑩) pp.174f.	
221/0	テラトス⑭	ストラテゴス	?	Purit. <i>Vit. Arist.</i> 47. 2; Polyb. 4. 6. 4	
220/19	テラトス⑮	ストラテゴス	シキエオン	Purit. <i>Vit. Arist.</i> 47. 2; Polyb. 4. 6. 7.	
219/8	小テラトス	ストラテゴス	シキエオン	Polyb. 4. 37. 1	
テラトス	メケトス	ストラテゴス	シキエオン	Polyb. 4. 59. 2	
テラトス	メケトス	ストラテゴス	シキエオン	Polyb. 4. 72. 9	
218/7	ピロエテテス	テラトス市内の統治	ペッレネ	Polyb. 4. 72. 9	
218	ピロエテテス	ストラテゴス	テラテ	Polyb. 4. 82. 8; Purit. <i>Vit. Arist.</i> 48	同盟拮抗戦争で、エリス軍と衝突
テラテ	テラテ	精銳部隊の将	テラテ	Polyb. 5. 17. 4	同上
テラテ	テラテ	精銳部隊の将	テラテ	Polyb. 5. 17. 4	同上
テラテ	テラテ	精銳部隊の将	テラテ	Polyb. 5. 17. 4	同上

「ヘテロス」に基づくアカイア連邦の公職制度と統合政策（草案）

217/6	アラトス⑩	Agartos	ストラテゴス	シキエオン	Polyb. 5. 30. 7.	
	リュコス	Lykos	ヒエギストラテゴス	アライ	Polyb. 5. 94. 1.	パトラーイの可能性もあり Cf. Walbank [1957] (第一巻注⑨) pp. 624f
	アモトコス	Amotokos	ヒッパルコス	?	Polyb. 5. 95. 7.	
216/5	アモセケノス④	Tyudéanos	ストラテゴス	?	Polyb. 5. 106. 1.	
※213/4	アラトス⑨	Agartos	ストラテゴス	シキエオン	Walbank [1953] (第一巻注⑩) pp. 174f	
213/2	アラトス⑧	Agartos	ストラテゴス	シキエオン	Polyb. 8. 12. 2; Plut. <i>Vit. Arist.</i> 53. 1.	アルタルコスによれば17回目
211/0	エウリュピオン	Eurykleon	ストラテゴス	?	Polyb. 10. 21. 1.	
210/9	キエウリテアス①	Cyclidas	ストラテゴス	?	Livy. 27. 31. 10.	
	アロポイマス	Phokrotany	ヒッパルコス	メガレーポリス	Polyb. 10. 22. 6; Plut. <i>Vit. Arist.</i> 7. 3.	
209/8	ニキテス	Nicias	ストラテゴス	?	Livy. 28. 8. 10.	
208/7	アロポイマス①	Phokrotany	ストラテゴス	メガレーポリス	Polyb. 11. 9. 1-10. 6; Plut. <i>Vit. Phil.</i> 8. 2.	
	アリスタイノス	Agortanos	右翼の騎兵指揮官 (「ソソテイネイテ」の職い)	デュモ	Polyb. 11. 11. 7.	歴史料には Agortanos とあり Cf. F. W. Walbank [1967] <i>Commentary on Polybius</i> vol. II, Oxford, p. 257; id. [1979] <i>Commentary on Polybius</i> vol. III, Oxford, p. 187.
	アタクシダモス I	Avatédanos	軍指揮官	?	Polyb. 11. 18. 1.	ソソテイネイテの職い
206/5	アロポイマス②	Phokrotany	ストラテゴス	メガレーポリス	Plut. <i>Vit. Phil.</i> 11. 1.	
※203/2	アロポイマス③	Phokrotany	ストラテゴス	メガレーポリス	Errington [1969] (第一巻注⑨) p. 250.	204/3年の可能性もあり
202/1	リュシッポス	Lycurgos	ストラテゴス	?	Plut. <i>Vit. Phil.</i> 12. 4.	
201/0	アロポイマス④	Phokrotany	ストラテゴス	メガレーポリス	Polyb. 16. 36f.	
200/199	キエウリテアス②	Cyclidas	ストラテゴス	?	Livy. 31. 25. 3; 32. 19. 2.	
199/8	アリスタイノス①	Agortanos	ストラテゴス	デュモ	Livy. 32. 19. 2; Plut. <i>Vit. Phil.</i> 13. 4, 17. 3.	アルタルコスなどでメガレーポリスともされるが、デュモの誤りとするのが有力 Cf. F. W. Walbank [1967] <i>Commentary on Polybius</i> vol. II, Oxford, p. 287.
	メムノン	Memnon	タミカルゴイ	ペリネ	Livy. 32. 22. 5.	
	アムシステムス	Aemisthemis	軍指揮官	デュモ	Livy. 32. 25. 6.	違反したアルゴスに持応
198/7	ニコストラトス	Nicostratus	ストラテゴス	デュモ	Livy. 32. 39. 7, 33. 14. 6.	
	アリスタイノス	Agortanos	講和会議への使節 (第二次マケドニア戦争)	?	Livy. 32. 32. 11; Polyb. 18. 1. 4.	199/8年アリスタイノス①を参照
	ケレノフオン	Euryklos	講和会議への使節 (第二次マケドニア戦争)	?	Livy. 32. 32. 11; Polyb. 18. 1. 4.	第二次マケドニア戦争
	テオクセノス	Theoxenus	軍司令官	?	Livy. 33. 18. 5.	ペライテ速証
197	テオクセノス	Theoxenus	軍司令官	?	Livy. 33. 18. 5.	
196/5	アムシステムス②	Aemisthemis	ストラテゴス	デュモ	Polyb. 18. 42. 6.	
196/5	アリスタイノス②	Agortanos	ストラテゴス	メガレーポリス	Livy. 34. 24. 1.	199/8年アリスタイノス①を参照
193/2	アロポイマス⑤	Phokrotany	ストラテゴス	メガレーポリス	Livy. 35. 25. 6.	
	テイコス	Tisus	タミカルゴイ	パトラーイ	Livy. 35. 26. 7.	
192/1	アロポフテアス①	Alophans	ストラテゴス	メガレーポリス	Livy. 36. 31. 6.	パトラーイとの戦争

190/89	フィオラテニス②	Διοφάνης	ストラテゴス	マガレー・ボリス	<i>Plut. Vit. Phil.</i> 16. 1.	
189	フィオラテニス	Διοφάνης	ローマへの使節	マガレー・ボリス	<i>Livy.</i> 38. 32. 6.	
189/8	フィロポテニス⑥	Φιλοπόλιμν	ローマへの使節	マガレー・ボリス	<i>Livy.</i> 38. 32. 6.	
187/6	フィロポテニス⑦	Φιλοπόλιμν	ストラテゴス	マガレー・ボリス	<i>Plut. Vit. Phil.</i> 16. 3.	
	ニコテニス	Νικόπολιος	ローマへの使節	エリス	<i>Plut. Vit. Phil.</i> 17. 4.	
	フィロポテニス	Φιλοπόλιος	エジプトへの使節	マガレー・ボリス	<i>Polyb.</i> 22. 7. 1. ; <i>Plut. Vit. Phil.</i> 17. 4.	
	テオドオリテニス	Θεοδοσιόδοτος	エジプトへの使節	シキエオン	<i>Polyb.</i> 22. 3. 6.	
	ロソテニス	Ροστέλης	エジプトへの使節	シキエオン	<i>Polyb.</i> 22. 3. 6.	
186/5	フリスタイノス③	Ἀρίστανος	ストラテゴス	テュヌ	<i>Polyb.</i> 22. 7. 2.	199/8年フリスタイノス①を参照 188/7年にもストラテゴスだった可能性も あり Cf. Errington [1969] (第一章注⑤) pp. 259-261.
	アホロニテニス	Ἀρολλωνίδης	ローマへの使節	シキエオン	<i>Polyb.</i> 22. 11. 6.	ローマへの使節への対応の不明
185/4	リュエコルテニス①	Λυκόκορος	ストラテゴス	マガレー・ボリス	<i>Livy.</i> 39. 35. 5.	
184/3	テルコン①	Ἀρχών	ストラテゴス	アゲイイラ	<i>Polyb.</i> 22. 19. 1.	190/89年あるいは187/6年のストラテゴスの可能性もあり Cf. Errington [1969] (第一章注⑥) pp. 255, 262f.
183/2	フィロポテニス⑧	Φιλοπόλιμν	ストラテゴス	マガレー・ボリス	<i>Plut. Vit. Phil.</i> 18. 1.	
	リュエコルテニス②	Λυκόκορος	代理ストラテゴス	マガレー・ボリス	<i>Polyb.</i> 23. 16. 1.	フィロポテニスの再加盟を報告
	ビツボス	Βίττος	ローマへの使節	テルゴス	<i>Polyb.</i> 23. 18. 3.	Cf. F. W. Walbank [1979] <i>Commentary on Polybius</i> vol. III, Oxford, p.248, 258.
※ 182/1	リュエコルテニス③	Λυκόκορος	ストラテゴス	マガレー・ボリス	<i>Polyb.</i> 24. 6. 4.	
181/0	リュエコルテニス	Ἰππεύβατος	ストラテゴス	シキエオン	<i>Polyb.</i> 24. 8. 1.	アトレマイトニスと世の死により中止
	テラトス (孫)	Ἰππεύβατος	エジプトへの使節	レオンテイオン	<i>Polyb.</i> 24. 6. 3.	スミルナの亡命者をめぐって
	リュエコルテニス	Καλλικράτης	ローマへの使節	レオンテイオン	<i>Polyb.</i> 24. 8. 8.	カッリクラテニスと共に
	リュエコルテニス II	Αυδίδος	ローマへの使節	マガレー・ボリス	<i>Polyb.</i> 24. 8. 8.	リュエコルテニス I の子孫か?
	テラトス (孫)	Ἀγορας	ローマへの使節	シキエオン	<i>Polyb.</i> 24. 8. 8.	カッリクラテニスと共に
180/79	カッリクラテニス	Καλλικράτης	ストラテゴス	レオンテイオン	<i>Polyb.</i> 24. 10. 14	179/8年の可能性もあり Cf. Errington [1969] (第一章注⑤) pp.264f.
174/3	クセナルコス	Χεναρχίος	ストラテゴス	アゲイイラ	<i>Livy.</i> 41. 23. 4.	
172/1	テルコン②	Ἀρχών	ストラテゴス	アゲイイラ	<i>Polyb.</i> 27. 2. 11.	
170/69	テルコン③	Ἀρχών	ストラテゴス	アゲイイラ	<i>Polyb.</i> 28. 6. 9.	
	ホリュエコルテニス	Πολύκορος	ストラテゴス	マガレー・ボリス	<i>Polyb.</i> 28. 6. 9.	
167	カッリクラテニス	Καλλικράτης	ローマへの使節	レオンテイオン	<i>Polyb.</i> 30. 13. 3.	第三次マケドニア戦争の勝利を祝う
	アギンテニス	Ἀγίντιος	ローマへの使節	レオンテイオン	<i>Polyb.</i> 30. 13. 3.	カッリクラテニスと共に
	テリストテニス	Ἀγοστόβατος	ローマへの使節	?	<i>Polyb.</i> 30. 13. 3.	カッリクラテニスと共に

165/4	エウレピダス	Φιλάρτος	ローマ軍への使節	?	Polyb. 30. 13. 3	カトリクテニスと共に
	エウレピダス	Εὐρέτιος	ローマへの使節	?	Polyb. 30. 30. 1	テオクレスの「人質」帰還を乞う
	テオクレス	Ἀναξίβιατος	ローマへの使節	メガラーポリス	Polyb. 30. 30. 1	テオクレスの「人質」帰還を乞う エウレピダスと共に
	サテュロス	Σάτυρος	ローマへの使節	?	Polyb. 30. 30. 1	エウレピダスと共に
160/69	テレクレス	Τηλεκλής	ローマへの使節	テオクレス	Polyb. 32. 3. 14	テオクレスの「人質」帰還を乞う
	ケレノス	Κελένος	ローマへの使節	テオクレス	Polyb. 32. 3. 14	テレクレスと共に
159/8	テテリダス	Θετιρίδας	ローマへの使節	メガラーポリス	Polyb. 32. 7. 1	ネリエトスの兄弟
	テテリダス	Τετιρίδας	ローマへの使節	?	Polyb. 32. 7. 1	テオクレスと共に
156/5	ケレノス	Κελένος	ローマへの使節	テオクレス	Polyb. 33. 1. 3	テオクレスと共に
	ケレノス	Κελένος	ローマへの使節	テオクレス	Polyb. 33. 1. 3	テオクレスと共に
	テレクレス	Τηλεκλής	ローマへの使節	テオクレス	Polyb. 33. 3. 1	2回目（目的は同じ）
	テオクレス	Θεοκλής	ローマへの使節	メガラーポリス	Polyb. 33. 3. 1	テレクレスと共に
	テオクレス	Θεοκλής	ローマへの使節	メガラーポリス	Polyb. 33. 3. 1	テレクレスと共に
※ 154/3	テレクレス	Τηλεκλής	ローマへの使節	テオクレス	Polyb. 33. 14	テレクレスと共に
151/0	メナルキダス	Μενάλκιδας	メガラーポリス	メナルキ	Paus. 7. 11. 7. Cf. Polyb. 30. 16. 2	Cf. F. W. Walbank [1979] <i>Commentary on Polybius</i> vol. III, Oxford, p.698.
150/49	テオクレス	Θεοκλής	メガラーポリス	メガラーポリス	Paus. 7. 12. 3. 6. Cf. Polyb. 38. 17ff.	Cf. F. W. Walbank [1979] <i>Commentary on Polybius</i> vol. III, Oxford, p.698.
149/8	ダモクリトス	Δαμόκριτος	メガラーポリス	?	Paus. 7. 13. 1. Cf. Polyb. 38. 17. 9	Cf. F. W. Walbank [1979] <i>Commentary on Polybius</i> vol. III, Oxford, p.698.
148/7	テオクレス	Θεοκλής	メガラーポリス	メガラーポリス	Polyb. 38. 15; Paus. 7. 12. 3.	
147/6	クリトラテニス	Κριτράτηνις	メガラーポリス	?	Polyb. 38. 10. 3-11. 11	
	ソシクラテニス	Σοσικράτηνις	メガラーポリス	?	Polyb. 38. 18. 2.	
	テテリダス	Θετιρίδας	ローマへの使節	メガラーポリス	Polyb. 38. 10. 11.	
146	テオクレス	Θεοκλής	メガラーポリス	メガラーポリス	Polyb. 38. 15. 1f.	クリトラテニスと戦死したため

シキュオン、スパルタはストラテゴスも出している。このことは、役職一般が集中する特定のポリスが、ノモグラフォイの場合も共通していることを示す。ただし、集中の度合がいくらか緩和されていることは注意すべきであろう。特に、役職一般では初期の加盟ポリスにしか見られなかった公職者の出身ポリスの分散が、後の加盟ポリスでも見られる。役職一般に含まれる高位の役職は構成人数に制限があるため、多くのポリスに割り当てることは難しいが、それに比べ重要度が低く、構成人数も多いノモグラフォイのような役職では、それが可能だったと推測される。

以上の分析から、役職一般とノモグラフォイの出身ポリスが特定のポリスに集中しているという共通の傾向が確認され

② この傾向は、後に加盟したポリリスに顕著であり、高位の役職によく見られるが、決して高位ではないノモグラフオイでも緩やかなが見られた。つまり、高位の役職の選出に影響を与えた個人的資質とは別に、役職全体の割り当てに影響する別の要素の存在が考えられるのである。

- ① E. Szanto [1979 原書 1892] *Das griechische Bürgerrecht*. New York: E. A. Freeman [1893] *History of Federal Government in Greece and Italy* 2nd ed., New York.
- ② 全つぎを挙げる紙幅はなごが、以下でも触れる A. Aymard [1938] *Les assembles des confédération achائية*, Bordeaux や J. A. O. Larsen [1968] *Greek Federal States*, Oxford などによる代表的研究に参る。
- ③ E. Badian [1968] *Foreign Clientelae 264-70 B. C.*, Oxford; Id. [1964] *Studies in Greek and Roman History*, Oxford; J. Deininger [1971] *Der politische Widerstand gegen Rom in Griechenland 217-86 v. Chr.*, Berlin. 中译 冯 燕 [1981] 『希腊のメトロポリス』三卷 著: A. Bastini [1987] *Der achaischen Bund als hellenische Mithinnacht. Geschichte des achaischen Konion in der Symmachie mit Rom*, Frankfurt am Main; Hinrich Meyer [1995] *Polybios und das Ende des Achaierbundes. Untersuchungen zu den römisch-achaischen Beziehungen ausgehend von der Mission des Kallicrates bis zur Zerstörung Korinths*, Munich.
- ④ トカイノ地方に於ては Rizakis の調査を主として、A. D. Rizakis [1991] *Achaia und Elis in der Antike*, Athens; Id. [1995] *Sources textuelles et histoire regionale*, Athens; Id. [1998] *La cite de Patras: épiographie et histoire*, Athens; Id. [2008] *Les cites archaïques: épiographie et histoire*, Athens による成果に参る。クロネハネ
- ⑤ ノス半島の他の地域でも考古学的調査が行われていることは、J. Roy [2003] *Achaian League in: Buraselis & Zoumboulakis* (eds.) [2003] 『オリーブ』注⑥ pp.80-95 に示されている。
- ⑥ Polyb. 2.43.1-2 改革の年代については「初めの二五年間、前述の諸都市は國制を共有し……」というポリュビオスの記述から、多くの研究者は改革を「連邦再建の二五年後」と解釈し、前二五七〇年に行われたとする（ただし、起点となる前二八二〇年を含む年代計算法を採らなければ、前二五六〇年となる）。F. W. Walbank [1957] *Commentary on Polybios* vol. I, Oxford, p.234 を参照。他方、R. M. Errington [1969] *Philipoemen*, Oxford, pp.268-270 は、「前述の諸都市」がのちに加盟したマイキオン、プーラ、カリュネイアを含まねばならないと解釈し、前二五三〇年を主張する。しかし、彼はマイキオンなどが加盟してから二五年と考えねばならない根拠を十分に説明していない。さらに、プーラとカリュネイアの加盟がアイギオンと同時期である確証はないため、それを基準とするのでは根拠として弱くと思われる。以上のことから、本稿で「連邦再建の二五年後」と解釈する。
- ⑦ 同一人物が複数回ストラテゴスに就任する事例は、決して珍しくはない。突出した例として、アラテス 41-6 回 (Plut. *Vit. Arat.* によれば 41-7 回)、フィロポイメン 48 回、ストラテゴスに就任したとされる。
- ⑧ Larsen [1968] (第一章注②) p.497.

- ⑧ Rizakis [2008] (第1章注④) N120.
- ⑨ Livy. 32. 22-8.
- ⑩ Larsen [1968] (第1章注②) pp.230f. また、先行研究でタミナルトイと同一視されるゲルミアなる役職もあるが、一例しか知られていないこと (Polyb. 38. 13. 1) への公職者の個人名や出身ポリスは不明のため、分析対象から除外。
- ⑪ F. W. Walbank [1933] *Aratas of Sicyon*, London と Erington [1969] (第1章注⑥) は、それぞれストラテゴスに就任したアラトスとフィロポイメンの伝記的な研究であり、特にその就任年代などに補論で焦点が当てられている。
- ⑫ J. L. O'Neill [1984-86] 'The Political Elites of the Achaian and Aitolian Leagues, *Anc. Soc.* 15-17, pp.33-61.
- ⑬ Larsen [1968] (第1章注②) pp.234f.
- ⑭ JG IV. 1² 73a. 年代は、前二二九〇八年以降とされる (Rizakis [1995] (第1章注④) N597)。
- ⑮ Aymard [1938] (第1章注③) pp.383-385. けれど J. A. O. Larsen [1965] *Representative Government in Greek and Roman History*, Los Angeles, p.217 n.2; Id. [1968] (第1章注③) p.231 への反駁も述べらる。
- ⑯ 早へゼ、H.Sweboda [1922] Die Neue Urkunden von Epidauros, *Hermes* 57, pp.518-534, 627 参照。アヤマドの著書に G. A. Lehmann [1983] Ervärgängen zur Struktur des achaischen Bundesstaates, *ZPE* 51, pp.237-261 と F. Gschnitzer [1985] Die Nomographenliste von Epidauros (*JG* IV 1², 73) und der Achaische Bund im späten 3. Jh. v. Chr., *ZPE* 58, pp.103-116 が挙げられる。
- ⑰ Lehmann [1983] (第1章注⑥) pp.245-248 は、大きなポリスに公職者番制が当てはまる可能性を指摘する。また一〇三人の配分が、公職者全体における各ポリス出身者の割合と対応していることを主張する。Gschnitzer [1985] (第1章注⑥) p.106 を参照。
- ⑱ T. Corsten [1999] *Vom Stamm zum Bund*, München, pp.160-177.
- ⑲ 一九九九年の発掘で出土した、ローマ時代の城壁に転用されたこと者であったこと。A.D.Rizakis [2003] Le collège des nomographes et le système de représentation dans le *Koivon* Achaen, in: Burselis & Zournbouliakis (eds), [2003] (「エトノス」) 注②, pp.80-95 が、その碑文の内容がこれまでのエトノス研究史を整理しているものの、テクスト自体は Rizakis [2008] (第1章注④) N116 で初めて公刊された。
- ⑳ Corsten [1999] (第1章注②) pp.165-172.
- ㉑ Polyb. 5. 94. 1.
- ㉒ 「*γενεαγενε* (*γενε Πατρική*)」などの部分は、原史料には「*祖国* (*της πατρικής*)」である。この場合、「祖国と負担を共にする集団」となり、シムンテレイアが明確に地区を指すとは言いが難く、アカイア連邦全体を指す可能性もある。実際、城江に於ける邦訳はその読みを採用している (ポリストロコス (城江良和訳) 『歴史』、二五八頁)。各々の部分を「*メタロイ* (*θηραϊκή*)」と読む研究者も存在する (Cf. Walbank [1957] (第1章注⑥) p.624)。Corsten も言及するが、一か所の根拠は Polyb. 38. 16. 4 「*μεταγενεων* と彼らと負担を共にする者 (*Πατριεὶς καὶ τὸ μετὰ τοῦτων ἀντιελεϊκόν*)」であるが、これは前出 Polyb. 5. 94. 1 の *μεταγενεων* が地区を意味することを前提に基づいて。
- ㉓ Polyb. 4. 59. 2 (「*μεταγενεων*」のトウリタイアに言及)、5. 95. 7 (「*μεταγενεων*」のフアライに言及)。
- ㉔ Polyb. 4. 60. 4-10.
- ㉕ Larsen [1968] (第1章注②) pp.220-221, 497 n.3.

②6 公職者一般については、O'Neill [1984: 66] 第一章注⑫) がまとめたリストを参考に、筆者が若干の追加を行った。依拠史料については、表三を参照。

②7 実際、シキュオンではアラトス、メガレーポリスではフィロポイメンの複数回の就任が大半を占める。

②8 デュメとフアライは前二八一／〇年に連邦を再建したポリスに含まれ (Polib. 2.41.1-2)、カリュネイアもそれから数年以内にアカイア連邦に加盟した (Polib. 2.41.14-15)。アイケイラとレオンテイオンの加盟時期は不明だが、前述の三ポリスと共に、再建以前の初期ア

カイア連邦に加盟していたとされる (Polib. 2.41.7-8)。

②9 分析の依拠史料の多くがポリュビオスに由来し (表三)、またポリュビオスの出身ポリスであるメガレーポリスからの事例が多い点より、この結果がポリュビオスの周囲の状況のみを伝えたものでしかないという可能性もある。ただし、メガレーポリスがかつて属していたアルカディア連邦の諸ポリス出身の公職者が、メガレーポリス以外には見いだせない一方で、初期の加盟ポリス出身の公職者については細かに出身ポリスを明示している点から、この結果を単にポリュビオスの身内びいきや無知のみに帰すことは妥当ではないだろう。

第二章 ポリスに代わる単位——エトノス

第一節 エトノスの新しい解釈

それでは、アカイア連邦において、役職全体に共通する割り当ての単位とは何だったのか。前章で言及したシュンテレイア以外に、そのような単位は現存史料に明言されていない。しかし、アカイア連邦の制度に精通していたはずのポリュビオスが言及していないことは、逆に一つの示唆を与える。それは、そのような単位が、明言せずとも当時の人々に理解できた、(と少なくともポリュビオスは考えた) ということである。すなわち、役職の割り当ては、当時の人々の間で一般的なペロポネソス半島の区分を単位としていたと推定される。残念ながら、本稿が対象とするアカイア連邦の時代に、そのような認識を明示する史料は見られない。そこで、時代は下るものの、ペロポネソス半島全体を区分して記述したストラボンとパウサニアスを、まずは議論の足がかりとする。

後一世紀に成立したとされるストラボンの『地理誌』は、ペロポネソス半島全体を扱うに当たり、「エトノス」とい

う単位によって、エリス、メッセニア、アカイア、地峡地域（シキエオン周辺とコリントス周辺）、ラコニケ、アルゴリス、アルカディアに区分している^①。一方、後二世紀に『ギリシア案内記』を著したパウサニアスは、その著書の構成からペロポネソス半島をアルゴリス、ラコニケ、メッセニア、エリス、アカイア、アルカディアの六つの「モイラ（部分）」に区分しているとされる^②。地峡地域をアルゴリスに含むか否かの違いはあるが、それ以外の区分で両者は共通している。時代の異なる二人が、ほぼ同じ認識を持っていることから、これは一般的な認識に近いと考えられる。ただし、区分の単位を表す語が両者で異なることから、それらの語が役職の割り当ての単位を特別に意味していたとは限らない。確実なことは、両者が区分に用いた単位が、アカイアに住むアカイア人、アルカディアに住むアルカディア人のように、その地域に住む人々を表す際にも用いられることである。このことは、地域だけでなく、そこに住む人々を認識する単位でもあったことを示す。つまり、両者が用いたのは、地域的アイデンティティに基づく単位とみなすことができる。

このようなアイデンティティに基づく単位の捉え方の参考となるのが、エスニシティ研究による新たなエトノス解釈である。従来エトノスは、ポリスあるいは連邦の前段階に位置する原始的な共同体とされ、部族国家と同義とされてきた^③。それは同時に「後進的」であることを意味する。この認識は、当時の研究者だけでなく、古代人の認識も反映していた。例えば、トゥキユデネスやアリストテレスによるエトノスへの言及は、彼らの住むポリス世界を説明するための補助的なものであった。他方で、エトノスは部族国家から発展した連邦にも適用された。しかし、エトノスの基本的な意味が「集団」であることから、Larsen は連邦を指す言葉としてエトノスは適切でないと主張する。彼は、本来部族国家を示すべきエトノスが古代において連邦を意味するのは、他に用いる言葉がなかったことによる慣用的なもので、「先進的な」連邦の本質を示してはいないと考えていたのである^④。伝統的に、エトノスにはポリスや連邦と対置されるネガティブな意味が込められていた^⑦。

しかし、近年の考古学的調査の成果を基にした研究は、エトノスを「エスニシティ」のアプローチから捉え直そうとし

た。^⑧ 細かな意見の相違はあるものの、彼らの研究によれば、エトノスとは擬似的な血縁関係への帰属意識や、独自の歴史や制度、信仰などを共有した集団とされ、それが今日の通説ともなっている。^⑨ その中で、エトノスが決して原初から一貫したのではなく、可変的な集団であるという点は注目に値する。エトノスは、伝統的な研究が部族国家を当てはめたような、何らかの政治組織を指す言葉ではなく、その時々々の自己認識にあわせて変化する人々の集団なのである。これは、エトノスという語が元来単なる「集団」を表す言葉であり、政治的な意味合いを有していなかったことから、納得されるであろう。^⑩ このエトノス解釈に従えば、あるポリスの構成員が、そのポリス以外の人々と、ポリスとは別のレベルで祖先や歴史を共有することも可能である。つまり、ポリスと同時に、それを含みこむエトノスが並存するのである。これによって、「部族国家（エトノス）から連邦国家（あるいはポリス）へ」という単線的な発展モデルは成立しなくなり、エトノスはネガティブな位置づけから解放される。さらに、ポリスとの並存だけでなく、例えば「ポイオティア人」や「イオニア人」、「ヘレネス（ギリシア人）」といったより大きな集団もエトノスと捉えれば、複数のエトノスが入れ子状態で並存することが可能となる。^⑪ 先に示したストラボンやパウサニアスの用いた地域的アイデンティティに基づく単位も、このような新しい解釈に従えば、現代的な分析概念としてのエトノスと捉え直すことができるだろう。

第二節 アカイア連邦における「エトノス」

前節のような新しい解釈を用いる場合、エトノスという分析概念は様々な基準によって多様に区分され、結果としてエトノスという語だけでは何を指しているのか判然としなくなる。そこで、新しい解釈に従ってエトノスを捉えるとき、その基準が明示されねばならない。前節で確認したように、ストラボンやパウサニアスにおける「エトノス」は地域的アイデンティティに基づいていた。^⑫ 本節では、この地域的アイデンティティの存在を示す要素を確認し、それがアカイア連邦の時代にも見られるのかを検証することで、アカイア連邦における「エトノス」を捉えていく。

(二) アルカディア

まず、地域的アイデンティティの存在を端的に示す例が、ポリュビオスの自己認識である。彼は、その出身ポリスであるメガレエポリスや、役職を務めたアカイア連邦だけでなく、ペロポネソス半島中央部のアルカディア地域にも帰属意識を有していた。同盟市戦争の最中、アルカディア地域のポリスであるキュナイタの凄惨な内紛の経緯を記したポリュビオスは、キュナイタ人の残虐さはアルカディア人 (*τοὺς τῶν Ἀρκάδιων ἔθνος*) の中でも例外であるとして、アルカディア人の擁護を図っている^⑩。ポリスが位置する地域への帰属意識は、地域的アイデンティティを示す第一の要素である。また、アルカディア諸ポリスがドーリス人の侵入の影響を受けなかった土着の出自を想定し、リュカオンを共通の始祖とする認識を有していたことが先行研究で指摘されている^⑪。独自のアルカディア方言の存在からも、擬似的な血縁関係や独自の文化・歴史（記憶）の共有が、地域的アイデンティティの存在を示す一つの要素であったことがわかる。また、前四世紀にアルカディア連邦という政治組織を既に形成していただけでなく、アカイア連邦に加盟した後の前二〇八年、マイアンドロス河畔のマグネシアにアシュリア（不可侵）を認めた書簡が、アカイア連邦とは別にアルカディアの諸ポリスからも送られている^⑫。このように、その地域に属する諸ポリスが協調行動をとる点も、地域的アイデンティティを示す要素である。これらをまとめると、地域的アイデンティティを示す要素とは、地域への帰属意識、その地域で共有された血縁関係や文化・歴史、地域に属する複数のポリス（あるいは人々）による協調行動である。本稿は、それらを基準としてアカイア連邦における「エトノス」を捉える。以上の分析からは、アルカディア地域に住む人々がアルカディアという「エトノス」を形成し、それがアカイア連邦と並存していたことが確認された^⑬。以降、アルカディア以外の各地域を同様に確認していく。

(二) アカイア

ペロポネソス半島北部のアカイア地域への帰属意識が、ヘレニズム時代以前に形成されていたことは、ヘロドトスやトゥキユデイデスにも言及されている。また、前四世紀に「アカイア人」と刻まれた硬貨が流通していたことは協調行動の一例であろう^{①⑦}。また後代には、ドーリス人に追放された先住民アカイア人を彼らの始祖とみなしていた^{①⑧}。そして、ヘレニズム時代のアカイア連邦の母体となった初期のアカイア連邦が、アイギオンに形成されたゼウス・ホマリオンの聖域を集会の場として成立したことは、彼らの共通の文化を象徴する^{①⑨}。何よりも、アカイア連邦の再建がアカイア人の手によるものだというポリュビオスの認識は、アカイア連邦の核として、アカイアの「エトノス」が当時も存在していたことを明示する。

(三) エリス

エリスは、ペロポネソス半島北西部を表す地域名であるとともに、その地域の中心市であるエリスというポリスも指す。先行研究によれば、都市エリスが前六世紀までに、近隣の有力ポリスのピサと全ギリシア的な聖域であるオリュンピアを併合し、前五世紀にはその領域をさらに拡大した。その後、スパルタに敗れたことで多くの領域を失うが、すぐにそれらを回復し、前四世紀半ばに一時的に独立していたピサを再併合して以降、再び全地域を都市エリスが支配するようになった。つまり、「エトノス」と捉えられる地域としてのエリスは既に前五世紀に成立していたのである。領域内の他のポリスは存続したものの、都市エリスに支配される従属的な地位におかれていたと考えられている^{②①}。都市エリスと離れた場所にあるポリス、レブレオンをエリスとラコニケの境界とするトゥキユデイデスの記述は、それを裏付けるであろう^{②②}。

この状況は、前三世紀末にも継続していた。ポリュビオスの記述からは、都市エリスとは異なる場所やポリスが地域としてのエリスに属するという認識が窺われる^{②③}。少なくとも地域外の人間であるポリュビオスは、エリスを一つの地域とし

て認識していた。そして、都市エリスおよびその支配下のポリスがアカイア連邦に加盟するまで、それに対立するアイトリア連邦やセレウコス朝と一貫して同盟していたことは、ヘレニズム時代にも地域としてのエリスが「エトノス」として協調した行動をとっていたことを強く示す。特にアイトリア連邦との関係は、アイトリアから帰還したエリスの王家の子孫オクシユロスを共通の始祖とする後代の認識が、アカイア連邦の時代にも存在したことを思わせる。祖先の共有だけでなく、全ギリシア的なオリュンピア競技祭を開催する地であったことも地域的アイデンティティの形成にとって重要な要素であった。

(四) メッセニア

ペロポネソス半島西部のメッセニアが、メッセニア戦争の敗北によりスパルタに従属したことはよく知られている。前四六〇年代の第三次メッセニア戦争にも敗れたが、前三七〇／六九年にエパメイノダスのペロポネソス遠征によってその支配から解放されると、メッセネというポリスが創建された。こうした記憶やメッセニア独自の信仰から、同じくドーリス系の始祖が想定されるスパルタとは異なるという意識、すなわちメッセニアの地域的アイデンティティの起源は古いと考えられてきた。

しかし、考古学的調査からは前古典期のメッセニアとスパルタの文化的差異は見いだせず、むしろ前四世紀以降のメッセニアの信仰も典型的なスパルタのそれと変わらないと指摘する先行研究が現れた。それによれば、スパルタ支配以前のメッセニアと前四世紀に新しく誕生したメッセニアとの間には直接の関係はなく、後者がスパルタ支配の中で前者を核とした地域的アイデンティティを新しく形成したというのである。この見解は、メッセネの創建後、ただちにメッセニア全体がスパルタの支配から離脱せず、南部やメッセニア湾岸のモトネ、アシネ、ファライは、前三三八年にフィリッポス二世によってメッセネに与えられるまでスパルタの支配下にあった事実と矛盾しない。メッセニアという地域的アイデンテ

イティの形成は、比較的新しいと考えるべきであろう。

この新しい地域的アイデンティティは、アカイア連邦の下でも継続していたのだろうか。まず、ポリュビオスがアルカディアとスパルタに隣接する地域としてメッセニアに言及している^{③④}。その中で「メッセニア人に対して常に敵対的」と述べられるように、スパルタはヘレニズム時代にも外敵として認識されていた。メッセニア戦争やスパルタからの独立の記憶は、この時代に地域的アイデンティティを強固にする役割を果たしたと考えられる^{③④}。また、アカイア連邦への加盟以前、前二〇七／六年とされる、マイアンドロス河畔のマグネシアで発見された碑文では、「メッセニア人のコイノン」という表現が見られる^{⑤⑥}。前三世紀末から前二世紀末の碑文でも、「トゥリア出身のメッセニア人」、「イトメ（メッセネの別名）出身のメッセニア人」といった表現が見られ、硬貨においても「メッセニア人」という銘が確認されている^⑦。これらから、メッセニアという地域への帰属意識とそれに基づく協同行動がヘレニズム時代にも継続していた様子が窺える。

なお、「メッセニア人のコイノン」においては、メッセネの支配が前三世紀になつて強まったとされる^⑧。つまり、前一九二年のアカイア連邦加盟以前に、エリスの「エトノス」同様、メッセネを中心とし、それ以外のポリスは従属的な地位におかれるという構造があった。その構造が、アカイア連邦加盟後も継続していたことは、前一八二年にいったん連邦から離脱したメッセネが再加盟した際、アビア、ファライ、トゥリアが分離され、メッセネとは別に連邦に加盟した事例から裏付けられる^⑨。連邦加盟後も、メッセネを中心とした「エトノス」は連邦と並存していたのである。

(五) ラケダイモン

スパルタは、それに従属するペリオイコイの共同体とともに「ラケダイモン人の国家」を形成していた^⑩。これも一種のエトノスと考えられる。ただし、「ラケダイモン人の国家」はスパルタの支配領域を指し、ペロポネソス半島南部のラコニケ地域^⑪だけでなく、古典期以前にはメッセニア地域も含んでいた。そのメッセニアは、前述の通りヘレニズム時代以

降「ラケダイモン人の国家」から分離し、別の「エトノス」を形成した。よって、「ラケダイモン人の国家」は、主にラコニケ地域と重なる「エトノス」となったと考えられる。本稿では、ラケダイモン人という自己認識に従って、この「エトノス」をラケダイモンとする。

スパルタを中心とするラケダイモンは、前二二二年のクレオメネス戦争、前一九五年のナビス戦争の敗北により、さらにその支配領域を縮小させ、最終的に前一九二年にスパルタはアカイア連邦に加盟した。その過程で、「エトノス」は消失していったのだろうか。アカイア連邦に加盟したスパルタでは、親アカイア派と反アカイア派の内紛が生じ、前一九一年に後者が政権を奪取すると、前者は南岸部に逃れた。この事例からは、アカイア連邦への対応をめぐり、スパルタと南岸部のポリスとの間で政治的な一体性が失われているように見える。しかし、スパルタから分離したはずの南部のペリオイコイ共同体が「ラケダイモン人のコイノン」を結成したことは、ラケダイモンというアイデンティティが維持されていたことを示す。その結成時期については議論があるものの、南部のペリオイコイ共同体がスパルタから分離させられた前一九五年であれば、スパルタと分かたれてなお、ラケダイモンという帰属意識を維持していたことになる。また、「ラケダイモン人のコイノン」の中心的祭祀の一つ、アスポス付近のアポロン・ヒュベルテレアタスの神官にスパルタ人が就任している。このことは、スパルタがこのコイノンの構成ポリスであることを直ちに示すわけではないが、祭祀を通じて、スパルタとそこから分かたれたペリオイコイ共同体が一つの「エトノス」を維持していた可能性を強く示唆する。さらに、アウグストゥス帝期に結成された「自由ラコニア同盟」の加盟ポリスは、「ラケダイモン人のコイノン」と重なる部分もある。以上より、アカイア連邦加盟以降も、ラケダイモンという「エトノス」が継続していたと考えられる。

(六) アルゴリスと地峡地域

ここまで検討してきた「エトノス」は、ストラボンとパウサニアスで共通していた。唯一異なっていたのは、ペロポネ

ネソス半島北東部のアルゴリス地域と地峡地域であった。ストラボンが地峡地域をアルゴリスの外にあるとする一方、パウサニアスは地峡地域をアルゴリスに含んでいる。^{④⑦}アカイア連邦加盟以前に、この地域が一つの地域的アイデンティティを持っていたかは疑わしい。この地域の人々は、確かにドーリス系の出自を共有していたものの^{④⑧}、あくまでもアルゴリスと地峡地域は二分されていた。例えば、アルゴリスに位置するアルゴスは伝統的にスパルタと敵対し、ペルシア戦争やペロポネソス戦争でも中立、時にアテナイに与した。一方で地峡地域に位置するコリントスは、ペルシア戦争ではギリシアに、ペロポネソス戦争ではスパルタに与し、コリントス戦争の際にはスパルタに反旗を翻している。また、四大競技祭のうち、ネメア祭はアルゴスが、イストミア祭はコリントスがそれぞれ主催している点でも一つにまとまっていたとは言い難い。地峡地域に位置するシキュオンも、かつてはアルゴスの支配下にあつたとされるが、僭主クレイステネスの下でアルゴスから文化的な独立を図つたと伝えられる。^{④⑨}主に古典期のポリスを扱った現代の研究書でも、アルゴリス地域と地峡地域は別の章で扱われている。^{④⑩}

では、ヘレニズム時代の両地域はどうだったのか。この地域で再建後に初めてアカイア連邦に加盟したのは、シキュオンである。これは同時に、アカイアの「エトノス」以外のポリスとしても初めての加盟であつた。以後、シキュオンはアカイア連邦の中心的ポリスとなつていく。アラトスによる解放までマケドニア軍の占領下にあつたコリントスは、連邦に加盟するもクレオメネス戦争では連邦から離反している。^{④⑪}戦後に再びマケドニアの支配下におかれ、第二次マケドニア戦争でローマ側について勝利するまで、その状態が継続した。^{④⑫}しかし、その後、少なくとも史料上にアカイア連邦とコリントスの対立は見られない。前一四六年のアカイア戦争後に、ローマがコリントスを徹底的に破壊した事件は、コリントスがアカイア連邦を象徴するポリスであつたことを窺わせる。そのコリントス破壊後、シキュオンがイストミア祭の開催を引き継いだことから、地峡地域のこの二ポリスは密接な関係を有していたと考えられる。

他方、親マケドニア派の僭主によって支配されていたアルゴスは、前三世紀末の一時的なマケドニア弱体化と、それに

伴うアカイア連邦の隆盛をみて、アカイア連邦に加盟した^{⑤③}。しかし、アルゴスはコリントス同様その後のクレオメネス戦争で離反し、その後もアカイア連邦に反抗的な姿勢を見せる。第二次マケドニア戦争では、ローマに与することに反対し、アカイア連邦から離反した^{⑤④}。アルゴスはその後、フィリッポス五世によってスパルタのナビスに引き渡される^{⑤⑤}。第二次マケドニア戦争後に、スパルタの領有するアルゴスをめぐってアカイア連邦とナビスとの対立が表面化すると、前一九五五年、フラミニヌス率いるローマ軍の援助を受けたアカイア連邦がナビスを破り、スパルタの支配下にあったアルゴスは連邦に再加盟した^{⑤⑦}。

以上の状況からは、アカイア連邦加盟後も、アルゴスとコリントス、シキユオンの間に同じ地域への帰属意識や協調行動は見られず、一つの「エトノス」であったとは考えられない。少なくとも、密接な関係を有したコリントスとシキユオンの地峡地域と、アルゴスを中心とするアルゴリスの、二つの「エトノス」と捉えるべきであろう。

- ① Strabo, 8.2.2.
- ② Paus. 5.1.1.ただし、同箇所からはコロキネンヌ半島を五区分々々人々の存在が窺われる（Cf. Thuc. 1.10.2; J.G.Frazier [1965] *Pausanias's Description of Greece. Translated with a Commentary* vol. III, p.465）。
- ③ F. Geckhitzer [1955] Stammes- und Ortsgemeinden im alten Griechenland, *Wien. Stud.* 68, pp.120-144; Id. [1971] Stadt und Stamm bei Homer, *Chiron* 1, pp.1-17.
- ④ Thuc. 1.5.1-3, 3.94.4; Arist. *Pol.* 2.1.4ff. 7.4.7.ただし、アリス・トリスは「連邦を指すエトノス」を、部族を指すエトノスを区別しつゝた可能性もある（Cf. Lehmann [2001] 「エトノス」注②） pp. 34-45）。同時代の言及として C.Morgan [2003] *Early Greek States Beyond the Polis*, London & New York, pp.7-9, 44-45, M.H.
- Hansen [1999] Aristotle's Reference to the Arkadian Federation at *Pol.* 1.261a29 in: T. H. Nielsen & J. Roy (eds.) *Defining Ancient Arkadia*, Copenhagen, pp.80-88 を参照。
- ⑤ Larsen [1955] (巻1章注⑤) pp.22-31; Id. [1968] (第一章注②) pp. 3-8, 11; Giovanni [1971] 「エトノス」注②) pp.71-93.
- ⑥ Larsen [1968] (巻1章注⑥) pp.8-10, especially p.7.
- ⑦ Giovanni [1971] 「エトノス」注②) p.13 を「ギリシア世界の共同体全体を表す『*nóticis kai éθnē*』とらへ慣用句におおむねエトノス (*éθnē*) をネガティブに解釈したのもその表れである。日本においでもそうした構図が浸透していたことは、合阪學 [1986] 『ギリシア・ポリスの国家理念——その歴史的發展に関する研究——』創文社 二二〇頁、二二三―二二四頁にみく表れている。
- ⑧ その背景には、A・D・スミス（栗山靖司訳）[1999 原著 1986]

- 「ネイションとエトノソフィヤ」(名古屋大学出版会)を代表とする社会学的議論がある。古代史でそれを取り入れた代表的な研究には以下①②が有名。C.Morgan [1991] *Ethnicity and Early Greek States. Historical and Material Perspectives*. *PCPS* 37. pp. 151-161; Id. [2000] *Politics without the Polis. Cities and Achaeans*. *Ethnos*. c. 800-500 BC. in: Brock & Hodkinson [2000] (『オックスフォード』註②) pp. 189-211; Id. [2003] (『オックスフォード』註③); Ch. Ulf [1996] *Griechische Ethnogenese versus Wanderungen von Stämmen und Stammstaaten* in: Id. (ed.) *Weg zur Genese griechischer Identität*. Berlin, pp. 240-280; C.Morgan & J.M.Hall [1996] *Achaean Polity and Achaean Colonization* in: M.H.Hansen (ed.) *Introduction to an Inventory of Polity*. Copenhagen, pp. 164-232; J.M.Hall [1997] *Ethnic Identity in Greek Antiquity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ③ 以下④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿の諸典類や参照: H.Cancik & H.Schneider (eds.) [2002] *Der Neue Pauly* Bd. 12/2. Stuttgart, s.v. "Ethnos" (K.Freitag); M.Gagarin et al. (eds.) [2010] *The Oxford Encyclopedia of Ancient Greece and Rome*. Oxford, s.v. "Ethnicity" (J.M.Hall), "Ethnos" (S.L.Larson); *OCD* s.v. "ethnicity" (C.Morgan & P.Heather).
- ④ Hall [1997] (『オックスフォード』註③) pp. 35f.; Morgan [2003] (『オックスフォード』註②) pp. 9f. n.58, n.59.
- ⑤ ムルチンソンとエトノソフィヤ (J.M.Hall [2002] *Hellenicity. Between Ethnicity and Culture*. Chicago) や『オックスフォード』註③の『エトノソフィヤ』を扱った K.Freitag [2007] *Ethnogenese, Ethnizität und die Entwicklung der griechischen Staatenwelt in der Antike*. *HZ* 285. pp.373-399 が代表例である。
- ⑥ 以降、本稿では地域的・マイノリティ・ソフィヤに基づいた集団や「鑑括強付」の「エトノソフィヤ」を表記する。
- ⑧ Polyb. 4. 20-21. Cf. Walbank [1957] (第一章註⑤) pp.464-469; Roy [2003] (第一章註⑥) pp.88f.
- ⑨ Strbo. 8. 1. 2. 8. 1.; Paus. 8. 1. 1-6. 3. 例として、J.Roy [1968] *The Son of Lycan in Pausanias' Arcadian King-List*. *BSA* 63. pp.287-292 に「わがメカローポリスの形成に携わった共同体の多くが、アルカメニア全体の伝説上の祖先とされるリュカオンを始祖に挙げている。メカローポリスの建設の詳細は「長谷川岳男 [2008] 『メカローポリスの成立——ポリス再考序論——』豊田浩志編『神は細部に宿り給ふ』南窓社、四三—六三頁も参照。
- ⑩ *Idagm.* 38. 1.58-68. ただし、その中には、アルカメニアではなく、アカイアに属するはずのトゥリタイアが含まれる。碑文を建立したマグネシア側のミスとする解釈もあるが、Paus. 6. 12. 8-9 にもトゥリタイア人をアルカデア人とする認識があった。これは、「トゥリタイアの自己認識が曖昧であり、外部(例えばマグネシア)の判断によってその帰属が変化したためではなからうか。「エトノス」の流動性を示す事例の一つといえる。本稿は、「アカイア連邦の政治に深く携わったポリュビオスの記述の中でアカイア連邦を再建した最初の四ポリスにトゥリタイアが含まれている点から、アカイア連邦加盟時はトゥリタイアがアカイアの「エトノス」に属していたと考ええる (Polyb. 2. 41. 12)。
- ⑪ T.H.Nielsen [2002] *Arkadia and Its Polity in the Archaic and Classical Periods*. Göttingen, especially pp.45-88. ただし、アルカデアの「エトノス」は常に一枚岩ではなかった。アルカデアの中には別の基準によるエトノスが存在したことは、クレオメネス戦争において、テゲア、マンティネイア、オルコメノス、カフエナイが独自の行動をこめていたことからも窺われる (Plut. *Vit. Cleom.* 4. 7. Cf. Walbank [1957] (第一章註⑥) pp.242f)。

- ① Hdt. 1. 145 で、前五世紀後半の「地区」がその地域に存在したことが Thuc. 2. 9. 2 で、ソロキメネース戦争の最初アカイア人が中立であることが示す。前五世紀のアカイアのことは C. Morgan & JMHall [2004] Achaia in: Hansen & Nielsen (ed.) [2004] 「エトノス」注①、pp.472-477 を参照。鷹賀将、酒川マコ、三木大輔、野野々木大吾、Head, *Hist. Num.*, p.416 を参照。
- ② Strabo. 8. 7. 1: Paus. 7. 1. 1-8.
- ③ Polyb. 2. 38. 5f. は初期の連邦の成立を前五世紀とす。連邦成立のメルクワールとされる神域の成立については Strabo. 8. 7. 5 を参照。その成立時期を前四世紀とす Morgan & Hall [1996] (第二章注②) で、前五世紀と題する F. W. Walbank [2000] Hellenes and Achaeans: 'Greek Nationality' revisited in: P.Flensted-Jensen (ed.) *Further Studies in the Ancient Greek Polis*, Stuttgart, pp.19-33 の脚注議論を参照。少々のアカイア人の神域や中立的なアカイアの「エトノス」を形成されたことが、意見が一致する。 Morgan & Hall [1996] (第二章注②) p.196 で、マキケンのアカイア人の神域とは、ペリクリウスのアカイア人の神域が、前二三三年に破壊されたことに由来する。
- ④ Polyb. 2. 41. 11-15.
- ⑤ ユニスム時代より前のエトノスについては J. Roy [1997] The Perioikoi of Elis in: MH.Hansen (ed.) *The Polis as an Urban Centre and as a Political Community*, Copenhagen, pp.282-320 で、T.H. Nielsen [2004] Elis in: Hansen & Nielsen (eds.) [2004] 「エトノス」注①、pp.489-504、特に pp.489-491 を参照。
- ⑥ Thuc. 5. 34. 1. なお、トリポネンは後にアウリッポネリアと呼ばれる地域に含まれる。 T.H.Nielsen [2004] Triphylia in: Hansen & Nielsen (eds.) [2004] 「エトノス」注①、pp.540-546、特に pp.543 を参照。
- ⑦ Polyb. 4. 9. 10 (トヘント). Polyb. 5. 3. 1 (キエント).
- ⑧ 同盟内戦争における同盟関係は Polyb. 4. 5. 4, 9. 10 で、Polyb. 4. 59-87, 5. 91-102 を参照。ロープ・シニア戦争については Polyb. 20. 3. 1-5 を参照。
- ⑨ Paus. 5. 3. 5-4. 2
- ⑩ Polyb. 4. 73. 10.
- ⑪ Strabo. 8. 4. 10: Paus. 4. 4. 4-24. 4.
- ⑫ Thuc. 1. 101-103.
- ⑬ Paus. 4. 27. 5-7; Diod. 15. 66. 1. Cf. Frazer [1965] (第二章注②) p. 419: P.J.Syrlanou [1998] *A Historical Commentary on Diodorus Siculus. Book 15*, Oxford, p.435f.
- ⑭ 先世史は連放された (Paus. 4. 3. 6) ユーリメ人の侵入以前に信仰されたエトノスのキエントを再考記したことが (Paus. 4. 3. 9)。
- ⑮ N.Luraghi, [2002] Becoming Messenian, *JHS* 122, pp.45-69; Id. [2008] *The Ancient Messenians. Constructions of Ethnicity and Memory*, Cambridge.
- ⑯ G.Shipley [2000] The Extent of Spartan Territory in the Late Classical and Hellenistic Period, *BSA* 95, pp.367-390, especially pp. 385f.
- ⑰ Polyb. 4. 31-33.
- ⑱ Polyb. 4. 32. 4. 第一次・第二次メッセニア戦争は、前三世紀か前二世紀とされるプリエネのミュロンの散文や、前二世紀頃のスキネのリアノスの叙事詩の中で脚色されて伝えられてきた。パウサニアスの記述からは推測される (Cf. Frazer [1965] (第二章注②) pp.411f.)。同じ著作が、反スパルタ感情を伴ったメッセニアの地域的アイデンティティの維持に寄与した可能性は十分考えられる。

- ② *Magna*. 43. 116-117.
 ③ *FD* III. 4. 5. 4. 6.
 ④ *Head, Hist. Num.* pp.431-2.
 ⑤ G. Shipley [2003] *Messenia in: Hansen & Nielsen (eds.)* [2004] (『ヒュンニ』註②) pp.547-550, 562; E. Meyer [1978] *Messenien und die Stadt Messene* (offprint from *RE* suppl. xv. 136-289), Munich, p. 284.
 ⑥ *Polyb.* 23. 17. 2.
 ⑦ 「ヒュンニ人の國家」については、古山正人 [2010] 「ラテーンキ人の國家構造」『國學院大學大學院紀要 文學研究科』四二一―一八三―一九六頁を参照。ヒュンニ人の地位をめぐる近年の議論については、古山正人 [2006] 「ヒュンニ人研究の現状」『國學院大學紀要』四四一―一六三―一八九頁に詳し。
 ⑧ 一般に用いられる「ラロニア」は、古代には用いられなかった (Cf. Shipley [2000] (第三章註②) p.368 n.7).
 ⑨ その地域は、ナブス戦争での敗北後にアカイア連邦の保護下に置かれた。ただし、連邦には加盟しつづきなされず (Cf. J. Briscoe [1981] *A Commentary on Livy Books XXXIV-XXXVII*, Oxford, p. 164)。亡命者の存在は、この内乱に端を発するスパルタの離脱問題が前一一八八年に解決した際に言及される (*Livy*. 38. 30. 6-34. 9, Cf. *Polyb.* 21. 32c. 3)。Errington [1969] 第一章註⑨ pp.134ff.を参照。
 ⑩ *IG* V. 1. 1226-7 = *SEG* 11. 938.
 ⑪ Shipley [2000] (第三章註②) p.368 n.9.
 ⑫ *IG* V. 1. 1014-1016, 古山正人 [2006] 「ラロニア南部地域ヒュンニ人共同体の動向」『國學院大學大學院紀要 文學研究科』三八一―

- 七一―一九四頁、特六一九〇頁も参照。
 ⑬ Strabo. 8. 5. 5; *Paus*. 3. 21. 7, Cf. Shipley [2000] (第三章註②) p.368.
 ⑭ Strabo. 8. 6. 4; *Paus*. 2. 1. 1.
 ⑮ 代表的なヒュンニ人のアルコスが、ドーリス人の侵入の後、最初に支配された都市として知られる (*Paus*. 2. 18. 7-19. 2)。ロリントスやシキエトンのアルコスの王家出身を始祖として居る (ロリントス: *Paus*. 2. 4. 3f. シキエトン: *Paus*. 2. 6. 6f).
 ⑯ *Hdt.* 5. 67-68
 ⑰ Hansen & Nielsen [2004] (『ヒュンニ』註②) pp.462-471 (地峡地域), pp.599-619 (マルトリス).
 ⑱ 加盟して居る *Polyb.* 2. 43. 4; *Plut. Vit. Arat.* 18-24。離反して居る *Polyb.* 2. 52. 2; *Plut. Vit. Arat.* 39. 3f. *Vit. Cleom.* 17. 3-5 を参照。
 ⑲ *Polyb.* 18. 46. 1-15; *Livy.* 33. 32. 1-10.
 ⑳ *Polyb.* 2. 44. 6.
 ㉑ *Polyb.* 2. 52. 2; *Plut. Vit. Arat.* 39. 4. *Vit. Cleom.* 17. 4-5. プルタルコスによれば、クレオメネスの奇襲を受けたアルコス市民が、無抵抗でスパルタ軍を受け入れたと云う。
 ㉒ *Livy.* 32. 22. 8-12. その理由として、マケドニア王フィリップス五世との個人的なつながりの他、マケドニア王家とアルコス人との血縁関係が挙げられることは、エトノスの観点から興味深い (Cf. *Hdt.* 5. 22; *Thuc.* 2. 99. 3).
 ㉓ *Livy.* 32. 38. 1-40. 11.
 ㉔ ナブス戦争開始して居る *Livy.* 34. 22. 4f. を、マルコスの再加盟して居る *Livy.* 34. 41. 3f. を参照。



アカイア連邦における「エトノス」(太字)と主要ポリス(筆者作成)

第三章 アカイア連邦の「エトノス」統合政策

第一節 「エトノス」に基づく分析

前章では、アカイア連邦における公職者全体の割り当ての単位として「エトノス」を提示し、実際に七つの「エトノス」を確認した。本章では、その「エトノス」に基づいて公職者の出身を分析し、その有効性を検証していく。表二および三に示した全公職者の出身ポリスなどの「エトノス」に属していたのかについては、古典期のポリスを地域ごとにとまとめたCPCのポリス目録の区分と概ね一致する。ただし、トゥリフュリア地方のヒュパネについては、アカイア連邦の下

ではアルカディアの「エトノス」に属していたと考えられる。^①

分析にあたって、連邦の拡大にともなう役職の構成の変化を考慮し、各ポリスの加盟時期によってアカイア連邦の歴史を三区区分する。前二八〇年の連邦の再建から前二一七年の同盟市戦争の終結、すなわちアルカディアや地峡地域、アルゴリスの諸ポリスが加盟し、アカイア連邦の拡大が一段落するまでを第一期とする。続いて、前一九二年のスパルタ加盟以前を第二期、以後を第三期に分ける。第三期には、スパルタをはじめ、メッセニアやエリスの諸ポリスが加盟した。

以上の区分に基づき、まずは役職一般について検証する(表四)。第一期(のべ三一人)には、アカイアのエトノスに属する諸ポリス

表四：役職一般の出身「エトノス」の推移

	第一期		第二期		第三期		合計	
アカイア	9	29%	9	38%	13	26%	31	30%
アルカディア	6	19%	5	21%	19	38%	30	29%
アルゴリス	1	3%	0	0%	1	2%	2	2%
地峡地域	8	26%	1	4%	5	10%	14	13%
ラケダイモン					1	2%	1	1%
エリス					1	2%	1	1%
メッセニア					0	0%	0	0%
不明	7	23%	9	38%	10	20%	26	25%
合計	31	100%	24	100%	50	100%	105	100%

から九人（二九％）、アルカディアから六人（一九％）、アルゴリスからは一人（三％）、地峡地域からは八人（二六％）の公職者が出ている。出身ポリス不明者は七人（二三％）であった。続く第二期（のべ二四人）には、それぞれ九人（三八％）、五人（二二％）、〇人（〇％）、一人（四％）となり、出身ポリス不明者は九人（三八％）である。最後に、第三期（のべ五〇人）はアカイアが三人（二六％）、アルカディアが一人（二六％）、アルゴリスが一人（二％）、地峡地域は五人（一〇％）、ラケダイモンとエリスが各一人（各二％）、メッセニアは〇人（〇％）、出身ポリス不明者は一〇人（二〇％）となる。

全時期を通じて、アカイアとアルカディアが目立ち、地峡地域が次に多くの公職者を出す。一方で、アルゴリスと第三期に加盟したメッセニアやラケダイモン、エリスからは極端に少ない。ここで注目すべきは、アカイア以外の各「エトノス」では、公職者の出身ポリスが一つに限られていることである。これは、第一章で示した特定のポリスへの集中という現象が、「エトノス」単位で起きていたことを示す。特に、アルカディアのメガラエポリス、地峡地域のシキユオンはこの傾向が強い。ただし、そもそも役職一般の事例が見られないメッセニアはもちろん、事例数が少ないアルゴリスやエリス、ラケダイモンにおいても、アルゴスやスパルタ、エリスが役職一般を独占していたと即断はできない。

続いて、独占の割合が比較的低いノモグラフィオイについて見てみよう（表五）。第一期または第二期に属するとされるエピダウロス碑文（二四人）^②では、アカイアの

表五：ノモグラフォイの出身「エトノス」

エビダウロス碑文			アイギオン碑文		
人数			人数		
アカイア	10	42%	アカイア	1?	
アルカディア	5	21%	アルカディア	12?	
アルゴリス	7	29%	アルゴリス	?	
地峡地域	2	8%	地峡地域	?	
ラケダイモン			ラケダイモン	3?	
エリス			エリス	?	
メッセニア			メッセニア	5?	
合計	24	100%	合計	21	

「エトノス」に属する諸ポリスからの出身者が一〇人（四二％）、アルカディアから五人（二二％）、アルゴリスから七人（二九％）、地峡地域から二人（八％）である。各「エトノス」において複数のノモグラフォイが割り当てられているのは、アカイアのアイギオンとデュメ、アルカディアのメガレーポリス、アルゴリスのアルゴス、地峡地域のシキユオンである。アカイアの「エトノス」以外で、複数のノモグラフォイを出すポリスは、各「エトノス」の中で一つに限られ、その三ポリスは、各「エトノス」の中で役職一般の割り当てを独占していたポリスと共通する。

また第三期に属するアイギオン碑文は、前半部の欠落により正確な数は不明だが、ノモグラフォイの数は連邦の拡大によって増加したと思われる。判明している二人のうち、アカイアの「エトノス」に一人、アルカディアに二人、ラケダイモンに三人、メッセニアに五人が割り当てられている。各「エトノス」で複数のノモグラフォイが割り当てられているメガレーポリスとスパルタは、役職一般の割り当てを独占していたポリスでもある。また、役職一般の事例が知られなかったメッセニアの「エトノス」では、メッセネが複数のノモグラフォイを割り当てられていた。

ここから、メッセネが役職一般を独占的に割り当てられていたと推測できる。ノモグラフォイの分析も、「エトノス」という単位に基づき役職が割り当てられていたことを示す。

ポリスに基づく先行研究の分析は、役職の割り当てにおける偏りを説明できなかった。しかし、「エトノス」に基づく分析から、その偏りは各「エトノス」の中に

優先的に役職を割り当てられるポリスが一つずつ存在していたためであることが示された。そして、そのようなポリスがアカイアを除く全ての「エトノス」にみられることは、連邦が「エトノス」のバランスに一定の配慮をしていたことを物語るといえよう。

第二節 アカイア連邦における「エトノス」の役割と統合の必要性

前節の分析結果は、アカイア連邦がポリスだけでなく、「エトノス」からも構成されていたという重層性を明らかにする。同じ「エトノス」に属する諸ポリスが行動を共にする傾向があったことは前章で示したが、そのため「エトノス」を通じた加盟ポリスの統合が連邦には求められたであろう。「エトノス」の中で、特定のポリスへ優先的に役職が割り当てられていたことは、そのポリスを代表として、各「エトノス」を統合しようとした連邦の政策の表れと考えられる。特定のポリスは連邦の政務に携わることで、連邦と各「エトノス」との橋渡し役となることを期待されていたのではないか。だが、「エトノス」ごとに事情は異なっていたと思われる。そもそもアカイアの「エトノス」で公職者の独占が見られないのは、連邦再建以前に既に強固な紐帯を形成しており、かつ連邦の核として他の「エトノス」を併合する主体であるため、そのような橋渡し役を設ける必要がなかったためであろう。また、地峡地域の「エトノス」の中で、地政学的にも重要なコリントスではなく、シキユオンが橋渡し役となっているのは、コリントスがクレオメネス戦争で連邦から離反したこと、前三世紀には一時期を除いて事実上マケドニアの支配下にあったこと、逆にシキユオンはアラトスの指導の下、アカイアの「エトノス」に属するポリス以外で初めて連邦に加盟したことなどの個別の理由が考えられる。

ただ、「エトノス」のバランスに配慮していたとはいえ、「エトノス」ごとの割り当てに差が見られることも確かである。これもまた、連邦の政策を反映するだろう。役職一般、中でも高位の役職であるストラテゴスにおいては、アルカディアおよび地峡地域と、アルゴリス、エリス、メッセニア、ラケダイモンとの差が著しいが、それは前者の「エトノス」がア

カイア連邦に協力的であるのに対し、後者が反抗的であったことによると思われる。アルゴスのアリストマコス、スパルタのメナルキダスがストラテゴスに就任した事例は、反抗的な「エトノス」の代表者をストラテゴスとして優遇すること、アカイア連邦への繋ぎ止めを図ったものと考えられる。しかし、ストラテゴスという重要な役職を常にそのような意図で決めるわけにはいかない。そのため、他の役職、特に構成人数の多いノモグラフィオイなどの役職が、役職一般に比較して多くそのような「エトノス」に割り当てられていたことを、ノモグラフィオイの「エトノス」分布は示している。ただし、アリストマコスによるアルゴスの離反や、メナルキダスと同時期のスパルタの反アカイアの姿勢、加盟後のメッセネの反乱などを鑑みるならば、連邦の政策は必ずしも思惑通りに機能していなかった。^③

以上の状況は、公職制度以外においても、「エトノス」に配慮した統合政策が必要とされていたことを示すだろう。ポリュビオスの主張するアカイア連邦の統一性は明らかに誇張であるが、^④それでもなお、実際にアカイア連邦は前二八〇年に再建されてから百四〇年間近く、一つの共同体として拡大しながら存続していた。では、公職制度以外に、どのような統合政策を用いてアカイア連邦は複数の「エトノス」の一体性を維持していたのであろうか。

しかし、エトノス研究が進展した現在でも、エトノスの統合の問題は等閑に付されている。その背景には、エトノスの形成過程や利用のされ方に焦点が当てられてきたことがある。^⑤確かに、エトノスが自己理解によって規定される以上、その形成について検討することは重要である。だが、「部族国家（エトノス）から連邦国家（コイノン／シユンポリティア）へ」という単線的な発展モデルが克服された今、改めてエトノスと連邦の関係を規定しなおさねばならない。^⑥そこで、如上の研究状況を踏まえ、アカイア連邦における「エトノス」の統合政策を、碑文上の「アカイア人のコイノン」という文言の用例と連邦の議会という二つの視点から明らかにしていく。^⑦

第三節 碑文にみられる「アカイア人のコイノン」

連邦を表すこともあるコイノンという語は、「共通の」を意味するコイノスの中性名詞化した言葉であり、古代ギリシアにおいて民会やポリスなど様々な紐帯に用いられていた言葉であった。^⑧従来の研究は、コイノンという語の意味を重視し、その結果、コイノンとは「共通のもの」、すなわち市民に「共通な」国家、「共通な」政府を表すため、連邦に適用されたのだと論じる。それ故、コイノンと表される共同体が、必ずしも連邦国家ではないというLafontの指摘は正当である。^⑩しかし、汎用的なコイノンという語が、連邦という特定の共同体に適用された個別の歴史的背景こそが、連邦を捉えるうえで重要と思われる。というのも、それぞれ個別の文脈にある共同体を「共通のもの」と表そうとした意図が、そこには込められているからである。以上の観点から、本節では個別の背景の検証として、碑文にみられる「コイノン」の用例、特に「アカイア人のコイノン」という言葉に着目する。碑文におけるコイノンの用法を追うことで、その碑文を設置した主体がコイノンに込めた意図を読み取れる可能性が高いからである。^⑪

「アカイア人のコイノン」の確実な初出は前二二〇年代であり、ポイオティアとフォキスの「人質」に対してプロクセニアを与えることが、「アカイア人のコイノン」によつて決議された。^⑫その後、前二世紀になつて頻繁にみられるようになる。「アカイア人のコイノン」がデュメのアリスタイノスを顕彰した碑文は、前一九六／五年にデルフォイに建立された。^⑬前一九〇年代半ばから前一八〇年代半ば、ミレトス人によつてデルフォイに建立された碑文にもコイノンが見られる。^⑭この碑文には、小アジアのミレトスとマグネシアとの和解に際して送られた使節の出身ポリスと名前が列挙され、その中に「アカイア人のコイノン」が含まれていた。これは、アカイア連邦以外の建立主体もコイノンを用いていた事例である。デルフォイには、「アカイア人のコイノン」がフィロポイメンの騎馬像を奉納したことを示す、前一八三年頃の碑文もある。^⑮「アカイア人のコイノン」への徳と好意を称えたアリストダモスの顕彰碑文は、アカイア連邦に加盟するエピダウロ

スによって前一八二年に建立された。オリュンピア出土の前一六九年頃の碑文は、「アカイア人のコイノン」によってローマのコンスルが顕彰されている。^⑮最後に、前二世紀半ばとされるアイゲイラ出土碑文では、あるポリス（おそらくアカイアのアイゲイラ）がポリュクラテスを「自身のポリスとアカイア人のコイノン」への徳と好意ゆえに顕彰している。^⑯

「アカイア人のコイノン」という語を含む碑文が見られ始めた前三世紀末は、連邦がアカイアの「エトノス」を越えて拡大した時期であった。しかし、その過程で連邦の一时的な分裂も経験した。特にクレオメネス戦争では、戦況の悪化によりアルカディアやアルゴリス、地峡地域の加盟ポリスが多く占領され、あるいは離反した。^⑰その中でも、アルカディアのマンティネイア、アルゴリスのアルゴス、地峡地域のコリントスといった有力ポリスが自発的に離反したことは大きな痛手となったであろう。^⑱その状況を踏まえれば、碑文における「コイノン」は、異なる「エトノス」を「アカイア」の名の下で「共通のもの」にする意図を明確に示したものと考えられる。「エトノス」を越えた拡大があまり見られなかった前四世紀のアカイア連邦に関わる碑文の中には「コイノン」が用いられていないのも、その解釈を補強する。^⑲また、碑文の多くがデルフォイやオリュンピアなどアカイア連邦の外部の人目にさらされる場所に奉納されていたことから、アカイア連邦がその統合の意図を対外的に主張していた可能性は高い。ミレトス人の建立した碑文にこの表現が見られたことは、そうした認識が広まった影響と解釈できる。そして、あくまでも推測ではあるが、ローマ支配下でギリシア本土が属州「アカイア」であったことは、こうした連邦のプロパガンダの延長線上で理解できるかもしれない。

第四節 アカイア連邦の議会

碑文にみられた「アカイア人のコイノン」は、「アカイア人」の名の下でアカイア連邦が一つの共同体であることを外部に喧伝する統合政策を表していたと、前節では考察した。一方で、アカイア連邦に加盟するポリスが「アカイア人のコイノン」を用いる例も見られた。前一二二年のエピダウロスによる顕彰碑文と、前二世紀半ばのポリュクラテスの顕彰碑

文である。後者を決議した主体と想定されるアイゲイラは、アカイアの「エトノス」に属するため、「アカイア人のコイノン」を用いることに抵抗はなかったであろう。他方で、アルゴリスの「エトノス」に属するエビダウロスでこのような認識が見られたことは、少なくとも前二世紀以降、「エトノス」が異なるポリスにも「アカイア人」の下での統合が受容されていたことを示す。しかし、そのような受容が必ずしも「エトノス」全体に普及していなかったことは、同じくアルゴリスに属するアルゴスが前二世紀に入ってもアカイア連邦に反抗的であったことから窺われる。「アカイア人」という「エトノス」を強調した統合政策は、連邦の抱える他の「エトノス」に対して必ずしも有効でなかったのである。そこで、本節では、碑文における「アカイア人のコイノン」以外の、アカイア連邦の内部に対する別の統合政策を考察する。

その手がかりはアカイア連邦の議会にある。アカイア連邦には定例のシユノドスと臨時のシユンクレトスという二種類の議会が招集されており、議論はあるものの、長谷川の研究に従えば、どちらにも評議会と総会が招集可能であった。評議会は代表者のみが参加可能な議会で、総会は連邦に属する成人男性市民の全てが出席可能な議会だったとされている。

この連邦の議会、特に総会は、理論的にはすべてのポリス、「エトノス」から分け隔てない政治参加を可能にする組織であった。つまり、議会は統合機能をもっていたと考えられる。²⁶⁾しかし、議会は本来の政治決断の場であり、統合機能は結果として生じた副作用にすぎない。果たして、アカイア連邦は副作用たる議会の統合機能を利用する意図を持っていたのか。

その意図を示唆するのが、前一八八年に当時のストラテゴスであるフィロポイメンによって行われた議会制度改革である。それによって、定例議会であるシユノドスの招集場所は各ポリスの持ち回りとなったが、それ以前のシユノドスはアイギオンに招集されていた。アイギオンとは、ゼウス・ホマリオンの聖域があり、アカイアの「エトノス」の形成に大きく寄与したアカイア色の強い場所である。フィロポイメンがどのような理由でこの改革を主導したのかは、史料がローマ時代のリウイウスの記述ということもあり、はつきりしない。確かに、前一九一年にペロポネソス半島が統一されたた

め、半島北辺のアイギオンへの総会招集が不便になったという現実的な理由も考えられる。しかし、この改革がダミウルゴイという公職者やアイギオンの住民の強い反対を受けてもなお断行されたことは、この改革に際して、連邦側が明確な目的をもっていたことを示す。その目的は、もう一つの議会シュンクレトスの招集場所から推測できる。臨時議会であるシュンクレトスは、その性格上、招集場所は時によって変化し、シュノドスの改革以前には、直前に加盟したラケダイモン、メッセニア、エリスを除く各「エトノス」に属するポリスで招集されたことが知られている。アカイアの「エトノス」以外で招集されたシュンクレトスによつて、その統合機能が発揮されたとすれば、連邦側がその機能をシュノドスでも活用しようと考えた可能性がある。これが、改革を断行した目的ではないだろうか。ただし、実際に史料から知られる改革後のシュノドス一七例のうち、場所が判明しているのは、メガレーポリスが四例、コリントスが三例、アイギオンが二例、シキユオンが一例の計一〇例で、残りの七例は不明とされる。アカイアとアルカディア、地峡地域に限定されており、シュノドスによる統合機能がそれ以外の「エトノス」で発揮されていないように見える。しかし、シュノドスの改革後のシュンクレトスがアルゴリスとエリスの「エトノス」でも招集されていることからは、史料に残っていないシュノドスがこれらの「エトノス」でも招集された可能性を示唆するだろう。

以上の議会改革による統合政策はポリスへの配慮ともみなせるが、注目すべきはアイギオンというアカイア色の強い場所から議会を解放したことである。アカイアの「エトノス」、そしてアカイア連邦成立の要となった場所から定例議会であるシュノドス招集の独占権を取り上げ、その招集場所を持ち回りにしたことは、「アカイア」連邦に統合される形になったその他の「エトノス」への連邦側の配慮といえるだろう。前一八八年の議会改革の時期に重なるスパルタの分離運動も、その改革に影響を与えたと考えられる。

アカイア連邦は、対外的に「アカイア人のコイノン」を謳う一方、議会の統合機能を利用するため、「アカイア」からの脱却も図った。アカイアの「エトノス」をめぐる矛盾するような方法を用いても、「エトノス」を連邦につなぎと

めようとする姿勢は、アカイア連邦の「エトノス」への配慮を際立たせている。

- ① トゥリフエリア地方は、前四世紀初めにエリスから分離した後、独自の地域アイデンティティを形成したとされるが、その後アルカディアの「エトノス」に取り込まれたと考えられる (Cf. Nielsen [2002] (第一章注⑨) pp.229-269)。
- ② 正確には、アルゴスの加盟 (前二二九/八年) から、ローマとの同盟によるアルゴスの脱退 (前一九八年) の間とされる。
- ③ アリストタモスの裏切りは Polyb. 2. 60. 6、前一五〇年頃のアカイア連邦とスバルタの対立は Paus. 7. 12. 4-14. 3、メッセネの反乱は Polyb. 23. 12. 3, 16. 1-13, 17. 2; Livy. 39. 49. 1-50. 9; Plut. *Vit. Phil.* 18. 3-20. 3; Paus. 8. 51. 5-7を参照。
- ④ Polyb. 2. 37. 11.
- ⑤ アカイアの「エトノス」の形成については、Walbank [2000] (第二章注⑨) がある。本稿の対象には含まれていないが、ポイオティアの例として、AKühr [2006] *Als Kadmos nach Boiotien kam. Polis und Ethnos im Spiegel tebanischer Gründungsmythen*, Stuttgart 9 参照。
- ⑥ H.Beck [2003] *New Approaches to Federalism in Ancient Greece. Perception and Perspectives in: Bursalis & Zomboulakis* (eds.) [2003] (43頁以下注③) pp.177-190に、同様の課題が指摘されている。
- ⑦ 外的要因、特にスバルタやマケドニアなどの脅威もアカイア連邦の統合に寄与したのは確かである。だが、本稿の問題意識が「エトノス」と連邦の関係にある以上、本章では、内的要因であるアカイア連邦の政策を扱う。
- ⑧ 合版 [1986] (第二章注⑦) 二〇九頁。
- ⑨ Giovannini [1971] (はじめに注⑤) pp.14-24は、用語の考察からそれらが古代における連邦意識を示すという考えを否定する。これに反論したが、Walbank [1985 原著 1976/7] (はじめに注⑤) pp.21-26であった。
- ⑩ Larsen [1968] (第一章注②) p.8.
- ⑪ 前野弘志 [2007] 「アッティカの碑文文化——政治・宗教・国家——」(広島大学出版会) を参照。本来ならば、非文字情報を含めて碑文を再現したうえで、議論を進めなければならない。しかし、今回扱う碑文は必ずしもその全てを復元できるわけではないため、主として碑文を設置した主体や場所に着目する。
- ⑫ それ以前の事例として、前二三四年頃とされるオルコメノスの加盟決議碑文 (IG V 2. 344 = Syl³ N.490) にも「アカイア人のコイノン」が記されていたと思われる。しかし、五行目や一〇行目の「アカイア」や「コイノン」の部分が復元によるため、本稿ではこの碑文を明確な事例としては取り上げない。
- ⑬ Syl³ N.519 = Rizakis [2008] (第一章注②) N.118.
- ⑭ *FD III. 3. 122 = Rizakis [1995] (第一章注④) N.630. Cf. J.Bousquet [1964] Inscriptions grecques concernant des Romains. BCH 88, pp. 607-615 especially 607-609.* この碑文で興味深いのは、顕彰理由としてエトノスや同盟国、互いのギリシア人への徳と好意によって顕彰されていることである。単数形のエトノスが、もしアカイア連邦全体を指すとしたら、連邦を一つのコイノンから一つのより大きなエトノスとする意識を読み取れるかもしれない。
- ⑮ Syl³ N.588, 118-21 (前一九六年と推定) = Rizakis [1995] (第一章注④) N.697 (前一八五—一八二年と推定)。

- ①⁹¹ *Syll.³ N.625.*
 ②⁹² W. Peek [1969] *Inscriften aus dem Asklepeion von Epidaurus*, Berlin, N.80.
 ③⁹³ *ITO N.318.*
 ④⁹⁴ Rizakis [2008] (第一章注④) N.173.
 ⑤⁹⁵ Polyb. 2.52.2.55.17によれば、スパルタに占領されたポリスはカプエアイ、スツレネ、フェネオス、アルゴス、フリウス、クレオナイ、エビダウロス、ヘルミオネ、トロイゼン、コリントス、メガレーポリスである。
 ⑥⁹⁶ テンティネイア (Polyb. 2.58.1-4; Plut. *Vit. Arat.* 39.1. *Vit. Cleom.* 14.1) / アルトス (Polyb. 2.52.2; Plut. *Vit. Arat.* 39.4. *Vit. Cleom.* 17.4-5) / コリントス (Polyb. 2.52.2-3; Plut. *Vit. Arat.* 40. *Vit. Cleom.* 19.1-2).
 ⑦⁹⁷ ただし、第三章注⑩のオルコメノスの加盟決議碑文で「アカイア人のコイノン」の復元が正しいならば、クレオメネス戦争の危機以前に、他の「エトノス」の加盟に際して統合の意図をもっていたと思われる。
 ⑧⁹⁸ 前四世紀半ば、コロネとの条約を記したとされる碑文 (Rizakis [2008] (第一章注④) N.120) は、欠損が大きいものの、連邦の中心であるアイギオンで発見されたため、アカイア連邦が設置した可能性が高い。だが、その中でコイノンは見られない一方、「アカイア人の評議会」(13) が記されている。また、同時期とされるアテナイとの同盟碑文では「アカイア人」としか記されていない (Syll.³ N.181. 11: 115. 119. 126. 140)。少なくとも、碑文の建立主体である当時のアテナイ人はアカイア連邦をコイノンと認識していなかった。逆に、「アカイア人」とは明記されずとも、アカイア連邦を指す「コイノン」が用いられていた事例が、前三世紀とされるデュメの市民権付与に関する碑文 (Syll.³ N.531) でみられる。この事例に関しては、連邦再建後ま

- もなく、他の「エトノス」が未加盟の時期だった可能性が高い。また、アカイアの「エトノス」に属するデュメが建立主体でもあるため、「アカイア人」をあまり強調する必要がなかったのかもしれない。
 ⑨⁹⁹ ただし、前二世紀半ば、連邦外のオロポス人によって建立された顯彰碑文 (Syll.³ N.676) は、アカイア連邦の二種類の議会に言及している人のにもかかわらず、コイノンは一度も現れない。そのため、「アカイア人のコイノン」という認識が完全に普及していたとは言えない。
 ⑩¹⁰⁰ 従来の研究は、前三世紀末(長谷川によれば前二二六年)まではシユノドスに評議会と総会が招集されていたこと、改革によってシユノクレトスが導入されると、そこで和戦や同盟などの重要議題を審議する総会が招集されたことについては意見を同じくする。しかし、改革以降、シユノドスに評議会と総会のどちらが招集されたのかで議論となっていた。詳細は、長谷川岳男 [1994] 「アカイア連邦の政治組織——συνεδριονと ἀρχαρχον——」『西洋古典学研究』四二: 七九—八九頁を参照。長谷川はそのような議論に対して、通説で重要議題を審議する総会が前提とされたシユノクレトスには、必ずしも総会が招集されているわけではなく、評議会も招集されていたこと、シユノドスにおいても総会と評議会が招集されていることを明らかにした。そこから、両者とも招集される議会は議題の内容に応じて異なっていたと考えたのである。この長谷川の解釈は、決して主流となっているわけではないが、説得力を持つものである。
 ⑪¹⁰¹ 合阪 [1986] (第二章注⑦) は、理念的な研究として、古典期には「デーモス(民会)」において、そしてヘレニスム・ローマ時代には「コイノン(総会)」において「全一性の理念」が一貫して作用していたと主張する。その観点から、アカイア連邦においては総会での「全一性の理念」が作用し、紐帯を形成する場として機能していたと指摘する。

② Livy. 38. 30. 1-5.

(第一章注⑤) p.139 も参照。

②③ 改革以前で招集場所が知られるシュンクレトスの事例は、地峡地域のシキエオン二例 (Pult. Vit. Anat. 40. 2. 41. 1; Livy. 32. 19. 5-23. 12) / アルカディアのメガレオポリス一例 (Polyb. 4. 9. 1-5. ただし、実質的には軍会のようなものであった) / アルゴリスのアルコス一例 (Livy. 31. 25. 2-10) の計四例である。

②④ 改革後で招集場所が知られるシュンクレトスの事例は、エリスが一例 (Livy. 38. 33. 3-5) / アルゴリスのアルコスが二例 (Polyb. 22. 10. 1-15; Livy. 42. 47. 7-8) / アルカディアのクレイトルが一例 (Livy. 39. 35. 8-37. 21) / 地峡地域のシキエオンが二例 (Polyb. 23. 17. 5-18. 5. 28. 13) / コリントスが一例 (CG VII. 411 = Sg. 71⁸ N675) の計七例である。

②⑤ Larsen [1965] (第一章注⑨) pp.175-188. 174-75. Errington [1969]

②⑥

お わ り に

新しいエトノス解釈に基づく分析から、アカイア連邦が公職制度において「エトノス」に配慮していたことが示された。しかし、それは同時に、アカイア連邦が複数の「エトノス」を一つの共同体に統合する必要性に迫られていたことを意味する。アカイア連邦は、対外的には「アカイア人のコイノン」の下で他の「エトノス」の統合を喧伝する一方、内部ではシユノドスの招集をアカイアの「エトノス」的色彩の強いアイギオンから解放することで他の「エトノス」への配慮を見せていた。公職制度の考察から推測された、特定のポリスによる橋渡し役も、そのような「エトノス」への配慮として位置づけられるべきだろう。ただし、そのような統合政策にも限界があった。特に、新たに加盟した「エトノス」から重要な公職者が就任する事例や、議会であるシユノドスやシュンクレトスがそこで招集された事例は少ない。抱え込む「エトノス」の増加によつて配慮が不十分となったアカイア連邦は、ローマという外部の仲裁者の下でその一体性をなんとか保ち続けるが、最終的にはスパルタの脱退をめぐる問題がローマとのアカイア戦争に発展したことで、その命脈が尽きることになる。

本稿が用いた「エトノス」を単位とする見方は、アカイア連邦だけでなく、古代ギリシアの他の連邦の捉え方にも有効であろう。例えば、アカイア連邦が特定の「エトノス」を越えて他の「エトノス」を含みながら拡大したのに対し、

前四世紀に発展したボイオテティア連邦では、あくまで特定の「エトノス」の中で連邦の統合を目指した^①。ここに、ヘレニズム時代のアカイア連邦の特質が立ち現れる。すなわち、アカイア連邦は「ポリスの連邦」と同等に、いやそれ以上に「エトノスの連邦」を目指していたのである。このことは、今まで「連邦」として一括りにされてきた共同体においても、「エトノス」の扱い方に大きな差異があつたことを示す。今後は、連邦を「エトノス」の扱い方によって新たに整理し直す作業が必要とされるであろう。さらに、「エトノス」を単位とする見方は、連邦だけでなくポリスとの比較をもその射程に収める。たとえば、これまでの（そしてこれからも）研究の中心であるアテナイは、ポリスがアッティカという「エトノス」と重なる共同体として、古代ギリシア史の中で特徴づけられることになる。このアテナイという共同体は、先述したアカイア連邦やボイオテティア連邦のような共同体とのどのような関係にあり、どのような歴史的位置づけを与えられるべきであろうか。今後、「エトノス」を単位とする観点から、古代ギリシアの共同体は新たに捉え直さねばならないだろう。

① 拙稿 [2009]（はじめに注⑥）p.11-13の「普遍平和」条約をめぐ

るテーバイの立場を参照。

（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）

The Official Organization and Integration Policies of the
Achaean Confederacy from the Perspective of *Ethnos*:
A New Perspective on Ancient Greek Communities

by

KISHIMOTO Kota

In ancient Greece, the polis was an important community but only one of several. There were various communities in ancient Greece in addition to the polis that we must also pay attention to in order to understand ancient Greece as a whole. Recently, many studies have been concerned with such communities. The federated Greek states are one of the most appropriate objects of study because they were formed out of many communities, for example the *poleis*, but also had a governing organization independent of the member communities.

Studies of the federated Greek states, however, are still being conducted from the viewpoint of polis. Because of this, some issues remain unexplained. One of them, which I consider, is how an official of the Achaean confederacy called the *nomographoi* was allotted to member *poleis*. Previous studies have regarded a district formed of *poleis*, the *synteleia*, as the only unit of the allotment. There has not been sufficient evidence to support this conclusion. To compensate for this lack of evidence, I analyzed the home *poleis* from which all of the officials, and not only the *nomographoi*, in the Achaean confederacy came. In the analysis, I discovered a tendency that almost all officials came from specific *poleis*. The cause of this bias cannot be explained from a viewpoint based on the polis alone.

In this article, I propose that *ethnos* is an effective perspective for solving this problem. Previously *ethnos* was regarded as referring to primitive tribes that existed prior to the appearance of the polis, but nowadays ethnological studies have reinterpreted the *ethnos* as referring to members of a community with common identities, for example ancestry, culture and history, etc. The distinguishing feature of this interpretation is that such identities were acquired and constructed. But, at the same time, it means that the communities were fluid and changeable according to circumstances. So, before at-

tempting an analysis based on the concept of *ethnos*, I must provide a definition of *ethnos* by determining the common elements that determine identity and then ascertain the existence of *ethnos* in the Achaean confederacy. In this article, I regard *ethnos* as a community based mainly on regional identity. Then, I observed that there were at least seven *ethne* in the Achaean confederacy, i.e., Arcadia, Achaea, Elis, Messenia, Lakedaimon, Argolid and Isthmus, and that the members of each *ethnos* tended to take concerted action.

Analyzing the problem of the allotment of all officials in the Achaean confederacy from the perspective of *ethnos*, I was able to demonstrate that they were allotted to specific *poleis* from each *ethnos*, for example Megalopolis in Arcadia, Sikyon in Isthmus, etc. It can be surmised that the allotment of officials in the Achaean confederacy was based on the *ethnos* as a unit. The Achaean confederacy was thus composed of not only *poleis* but also *ethne*.

Because the Achaean confederacy included many *ethne*, policies to integrate them into a single confederacy were necessary. In this article, I consider such policies through two approaches, the usage of the phrase *achaeen koinon* in inscriptions and the reform of the federal meeting. The words *achaeen koinon* were used mainly by the Achaean confederacy itself and the objects on which these inscriptions with these words are found were erected in areas where they would have been seen by many people. The usage of *achaeen koinon* in inscriptions, therefore, shows the policy of the Achaean confederacy to publicly proclaim to the outside world that the confederacy was the *koinon* (common property) of the Achaeans. On the other hand, reform of the federal meeting showed internal policy making. Philopoemen, the leader of the confederacy, changed the location of the *synodos* (regular meeting), which had been held only at Aigion, the political and religious centre of the Achaean *ethnos*. By this reform, the *synodos* came to be held in turn among member *poleis*. The reform was surely a policy aimed at members of *ethne* other than Achaea. It was due to the existence of *ethnos* that Achaean confederacy had to employ those two integration policies.

From the above, I have demonstrated that the confederacy took not only polis but also *ethnos* into consideration. That is to say, there was a multilayered structure where various communities coexisted and considered each other's interests. Hereafter, we should treat Greek communities as

being based on such a structure. The *ethnos* would be an especially effective perspective for other communities and not only the federated states. From this perspective, I think that the ancient Greek world will manifest an aspect unlike that previously seen.